毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊 定價金五錢



明治二十九年四月十日發兌

第七拾五號

○小兒○はよく肥へて笑ひ顔の愛らしき筈のものなり痩せたる小兒は興味尠きものなり之れには彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して飲み易く且つ味ひよく製造したる**スコツト乳菓**が最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり◎此の乳菓が滋養分に富むとは他に比類なきが故に虛弱なる人々は之れを用ゐて奇効を見べし

特に**虛弱なる婦人**は一度之れを服用せば忽ち健全なる身躰となること疑なし

○咳嗽及風邪○は病の初めなり、次に來るものは肺の衰弱にして身躰を痩せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萌芽を顯すなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なる**スコツト乳菓**は能く咳嗽及風邪を去り肺臓を強くして活力を與ふること實に驚くべし◎◎◎此の乳菓の洪大なる滋養分が**嬰兒、小兒**及虛弱なる母親を益すること實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

此の乳菓が精氣を増し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の擧て證明するところなり

○スコツト乳菓の說明書御入用なれば横濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて御承知の旨御申越あれば無代價にて呈す



左の大取次所の外各藥舗にて賣捌き居れば御購求ありたし

横濱境町	友田嘉兵衛
仝　境町	鳥居德兵衛
仝　太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	島田久兵衛
仝　室町	資生堂
仝　本町三丁目	島田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
仝　道修町二丁目	武田長兵衛
仝　道修町三丁目	田邊五兵衛
仝　道修町二丁目	田畑利兵衛
仝　道修町二丁目	福田淸右衛門
仝　道修町二丁目	鹽野儀三郎

民友社出版書籍

社會叢書

- 第一卷 海の日本人 定價十錢 郵稅二錢
- 第二卷 簡易生活 定價十錢 郵稅二錢
- 第三卷 娛樂俱樂部 定價十錢 郵稅二錢
- 第四卷 事務世界 定價十錢 郵稅二錢

青年叢書

- 第一卷 武備教育 定價十二錢 郵稅二錢
- 第二卷 遠征 定價十二錢 郵稅二錢
- 號外 本朝美術 定價十二錢 郵稅二錢
- 第三卷 市民 定價十二錢 郵稅二錢
- 第四卷 職業論 定價十二錢 郵稅二錢
- 第五卷 技術 定價十二錢 郵稅二錢
- 第六卷 學校生涯 定價十二錢 郵稅二錢
- 第七卷 征塵餘錄 定價金十五錢 郵稅二錢

家庭叢書

- 第一卷 家庭の和樂 定價十錢 郵稅二錢
- 第二卷 夏の家庭 定價十錢 郵稅二錢
- 第三卷 玩具と遊戲 定價十錢 郵稅二錢
- 第四卷 家庭教育 定價十錢 郵稅二錢
- 第五卷 小兒養育 定價十錢 郵稅二錢
- 第六卷 家庭衞生 定價十錢 郵稅二錢
- 第七卷 家政整理 定價十錢 郵稅二錢
- 第八卷 簡易料理 定價十錢 郵稅二錢
- 第九卷 社交一斑 定價十錢 郵稅二錢
- 第十卷 婦人と職業 定價十錢 郵稅二錢
- 號外 家庭理財 定價十錢 郵稅二錢
- 號外 名士と家庭 定價十錢 郵稅二錢

平民叢書

- 第一卷 十九世紀の大勢 定價十二錢 郵稅二錢

明治廿九年四月十日發行

家庭雜誌第七拾五號

目錄

口繪

社説

科學

文藝

談叢

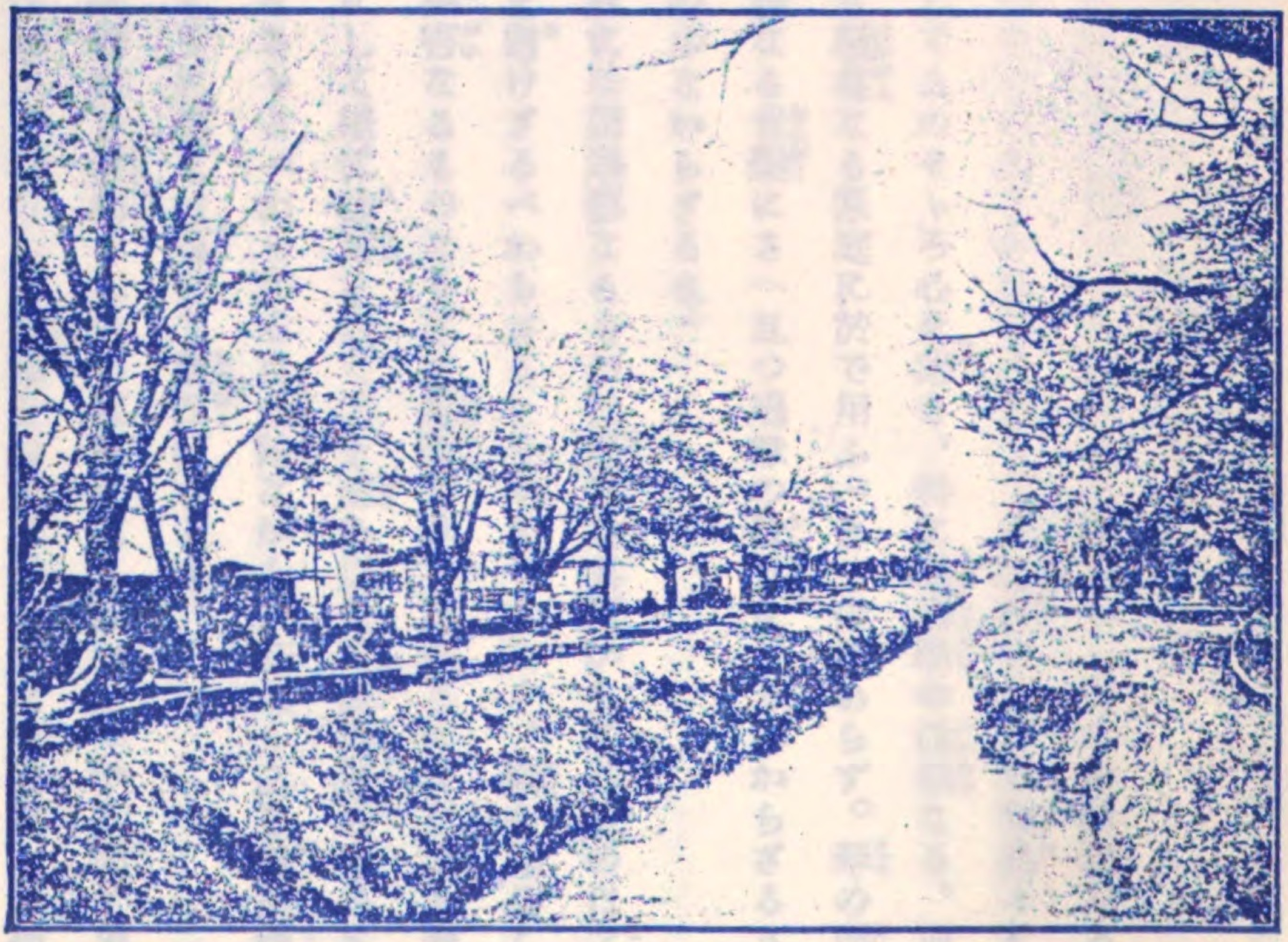
家政

雜錄

歌苑



瀧櫻



小金井の櫻

小川一眞寫眞彫刻銅版及印刷

家庭雜誌第七拾五號　（明治廿九年四月十日發兌）

社説

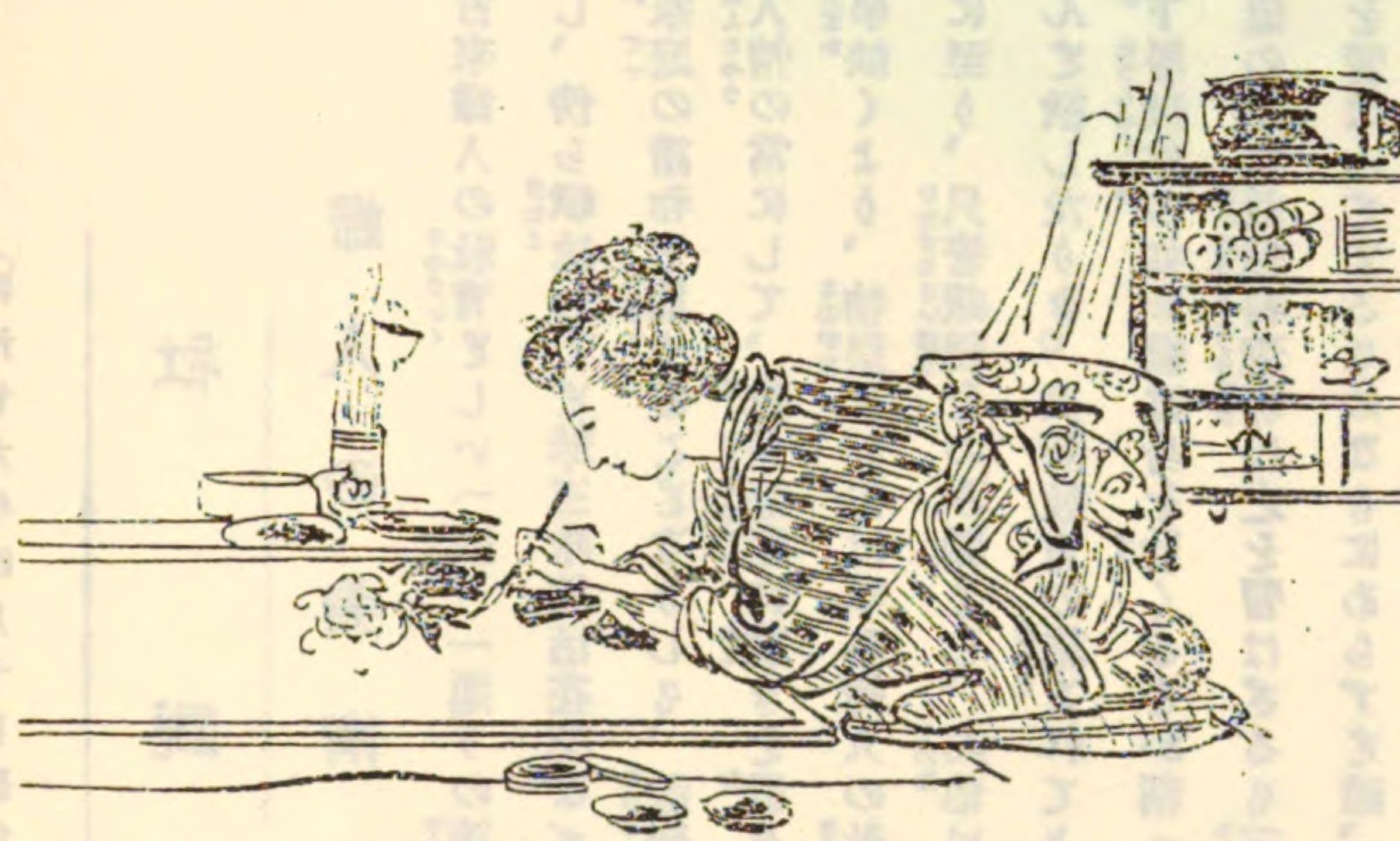
婦人の美術心

古來婦人の敎育としいへば、一通りの讀書裁縫を主とし、傍ら歌詠むこと琴三味線活花茶などを習ひ、以て家庭の諧和を助くることとなりしも、遊樂に荒み易きは人情の常にして、兎角遊藝に重きを置き、却て實用に事缺くより、物堅き父母は寧ろ婦人の敎育を嫌惡するに至り、只管裁縫をのみ勵まし、其他は之を顧みざらんと欲したりき。又新敎育の施されてよりも、都會の下層社會の如き藝は身を助くるとか稱へて賤むべき希望の爲に裁縫料理等は之を習はざるも三味線は必ず之を習はんとするものなきにあらずと雖、一般の傾向は同じく實用を旨とし、所謂遊藝は婦人を墮落せしむる器械の如くに之を考ふるものなからず。

勿論所謂遊藝の中には婦人を墮落せしむるの器械たるべきものたしかにこれあり。三味線の如き其聲靡々として人のそゞろ心を惹き、特に其唱歌の淫猥なる、迚も敬虔なる家庭に於て用ふべきものにあらず。琴の閑雅なる音樂にさへ且つ唱歌の改良せざるべからざるもの少なからざる也。

故に所謂遊藝なるものは是非共其良からざるものは之を避けざるべからざること申までもなく、縱令其全く無害なるものなりとも遊藝なれば則ち實用を先にして纔に餘閑を以て之を修め以て其家庭諧和の具となさゞるべからざるは勿論ながら、亦全く之を無用視するに至ては過ぎて猶及ばざる也。

成程之を遊藝としいへば何となく善からぬやう聞こゆれども、美はしき言葉を以て之を言顯はせば則ち美術



的修養也。繪畫の如き、詩歌の如き、高尚なる音樂の如き、獨り以て家庭諧和の具たるべきのみならず、自ら其心身を慰むべきものなるのみならず、之を善用すれば大に其品性を養ひ、氣格を高尚にすべく、又子女の教育にも必須なるものたり。

若し婦人にして繪心あらん乎、自ら之を畫き或は人の畫きたるものを巧に撰擇して、之を家庭敎育の有力なる敎授器械となし、依りて以て子女の心性を陶冶すべく、或は之を室内の裝飾に應用して一家の清雅諧調なる氣風を養ふべし。

若し婦人にして詩歌の才能あらん乎、以て自ら悶を遣り情を暢ふるの樂を享くべく、以て人の悶を解き憂を慰むべし。

　淺香山影さへ見ゆる山の井の
　　淺くは人を思ふものかは。

と詠じて葛城の王の恚を解きたる彼女はいふもさらなり、

　風吹けばおきつ白浪たつた山
　　夜半にや君がひとり越ゆらん。

と歌ひて夫のわたし乙女を訪はんとするの意を翻さしめたる彼女はいふもさらなり、

身をつみて人の痛さぞ知られける
戀しかりけり戀しかるらん。

と言遣りて大内義興の妾を感ぜしめたる彼女はいふもさらなり、

我子ならともには遣れじ雪の暮。

と吟じて邑人が小丁稚を雪夜の小集に伴せしめんと欲したるを止めし彼女に至るまで、赤心より發したる詩歌の人を動かす一にして足らず。

若し婦人にして高尙なる音樂に堪能ならん乎、夫婿終日の勤勞も燈下一曲の絲竹に之を慰藉し得て餘りあること勿論也。

且つ美術心あるものは其心性に含蓄ありて優にやさしく、自ら立居振舞の都雅なるを保つを得べし。

春の夜のやみはあやなし梅花
色こそ見へね香やはかくるゝ。

夜陰は以て梅花の馥郁たるを掩ふに足らず、心情にして眞に都雅ならば焉くんぞ擧止の都雅ならざるを憂へん。婦人の美術心を養ふは其品格氣韻を發ふにだても自ら缺くべからざるものあるを知らずや。

古人は歌ひき、

人毎に一つの癖はあるものを
われにはゆるせ敷島の道。

と。人は男子にまれ婦人にまれ何事か一の好み樂む所なきを得ざるものたり。已に一の好み樂む所なきを得ずとすれば、成るべく高尙にして我れ人共に益する所あるものを擇ぶべきは當然なるのみならず、人若し高尙なる樂みを樂むにあらずんば竟に却て下卑なる樂を樂むに至らんとす。而して美術上の樂みは樂みの最も高尙なるもの也。

今や春風駘蕩上野墨田の春は滿都の人を狂了せんと

す。等しく花を觀るにも心文雅に存し美を翫ぶを主意とせば、自ら下卑なる樂みに遠ざかるべく、夫妻姉妹相携へて去らんに、一韻の短歌も能く其興を添ふること八百松植半等に醉飽を事とせんとするもの丶比にあらず。

要するに婦人に美術心あるは其婦人をして奥床かしからしむるもの也。戒は唯荒むべからざるに在るのみ、實用を先にして之を餘業にすべきに在るのみ。

科學

本艸學は他の學術に比して多くの樂趣ありて性情を和ぐものなり故に本艸學者には古來長壽の人多し

動物

松ケ枝

幾多の學士幾多の日月を費して研究する動物學界趣味深きは云ふまでもなけれども亦吾人日常接する處或は聞く處の動物の性質慣習等を知るは豈有益なるとにあらずや

食肉獸

食肉獸とは凡て昆虫及び禽獸を餌食として生活する四足獸を云ふ

何故食肉獸は大なる牙を有するや

彼等の餌とする動物を捕食するに適せしむる爲めなり

解剖學上如何なる著るしき構造は彼等が生活の法度に適するや

彼等は生きたる動物を捕食するものなるが故追撃するに至て敏捷なり而してその餌を捕獲するに適切なる強固の爪を具ふ此の爪は平常退縮して指先の間に隱るゝが故地上を歩むも傷くの憂なし視力は至て鋭く殊に夜間に於て一層然り聽覺の感覺よく發育し鼻

吼には鬚を具ふ是れ極微の接觸にも感じ得らるべき爲めなり又足は平滑なるが故歩むも響くとなし

何故獅子は大なる鬚を有するや

獅子その餌を索めて巡行するとき或は單に運動するの時鬚は著るしく後方に垂れて肩を覆ひ以て掠奪に用ゆる彼の腕をして運行自在ならしむる强大なる筋を保護し如何に晝間沙漠の炎熱の下に巡行するも或は夜の冷氣に歩動するも爲めに筋力の硬縮し或は弛まりて弱わる如きこと絕てあるなし

何故獅子は獸類の王と稱せらるゝや

彼の風采に犯すべからざるの威嚴あり彼の性情に一種氣高き處ありて他の數萬の獸類に超越するが故なり彼の勇氣と決定は目ざましきものにして彼の力は又言外のものなり恰も猫の鼠を啣ふるが如く容易に大なる牝犢或は羝羊を運び去るなり

人もし猫族の獸類に襲はれし時最初の打擊の後靜かにして抵抗せざれば時に生命を救助し得らるゝことあるは何故なりや

是れその捕獲せし餌に一度うち勝ちしと云ふ觀念が幾分の樂みを與ふるものと見え捕獲せし後暫時は何等の害も與へずしてその傍に見張り居るは猫族の慣性なり斯くて猫はその捕へし鼠の傍に坐して敢て食はんともせず暫時見てたのしみ居るなり獅子虎等も之に同じ然れども若しその餌逃れんとするか或は何等かの動作を示はす時は忽ち飛びかゝりて己れの手中に任かするなり

左の記事はこの殊種の性習を說き明かさん

千八百三十一年の夏東印度のラカートを隔る二十餘里鬱蒼たる深林の近傍に二頭の獅子顯はれたるを聞き大佐ウードハオス二名の士官を從ひて銃獵せんと出でかけたり暫時林中を搜探せし後林の端に當り一頭の獅子顯はれたるを見忽ち發砲せしに命中あやま

たず忽ち倒れたり即ち他の獅子を追探せしが見失ひたれば大佐は心昂がり是非搜探して躡んものと林中に入らんとする時忽ち强猛なる風貌もてかの獅子出で來りぬ一士官手早く發銃せしに不運にも狙ひ外れたれば獅子は益々怒り狂ひ僅かの距離に立ち居たる大佐を目がけて飛び掛りたり强大なる掌の下に大佐を抑へ付けしが暫くして手を離し靜かに見守り居たり數分の後大佐は起き上らんと勉めしに忽ち獅子は抑制して腕をいたく擊碎せり大佐はその猫族の慣性を忘れたるを覺り流血淋漓として靜かに臥し居りしに獅子は叉手を離して暫時ながめ居たりその間に彼の士官等は大佐の身に觸れざるやう發砲したるに幸にも獅子は倒れて大佐は萬死の中より救はるゝを得たり

豹、虎等の聽感鋭敏なるは何故なりや

彼等は多く唯だ森林にて餌を捕獲し深林中に潜伏するを以て鋭敏なる聽感はその餌となるべき動物を發見すると他動物より發見せらるゝを防ぐとに於て必要なり

動物界の自然法にて輕く踏み歩むの獸類は必ず捷き耳を有するなりこの法則は延て人界にも及ぼし足音輕き人は必ず聽覺を有し重き足音と鈍き聽覺とは相伴ふを見るなり

獅子虎等の舌の表面の甚だしく粗糙なるは何故なりや

是れ骨に附着せる肉を刮り取るに適切ならしむる爲めなり吾人の家に飼ひ置く猫の舌を見なばこの理の幾分を解し得らるべし

然れども獅子虎等に於てはその粗糙甚だしきが故その舌もて一度人の手に觸るれば皮膚は忽ち剝ぎ取らるゝほどなり

食肉獸通常その餌に飛びかゝるの前吠哮するは何故なりや

彼等は吼へてその相手を恐怖せしめ以て打ち勝つに容易ならしむる爲めなり然れ共猫の如きは默してその餌を捕ひ食するに當りて喊ぶなりこれもし何物か來りてその得たる餌を盜み取らんかを恐るゝにより斯くは喊びて他動物の來襲を防ぐなり

食肉獸類の瞳子に樣々なる形あるは何故なりや

是れ種々なる動物の種々なる慣習は從て各異りたる視力を要するが故なり、大より小と收縮する圓き瞳は常に垂直地平斜めの何れを問はず凡ての方向に容易に視線を向くるを要する動物に見受けらるゝなり又垂直線に(殊に彼等の上方にある者)視るの必要多き動物は縱に付きたる瞳を有し地平面に視線を用ゆる種族には地平形なる瞳あるなり

斯くて廣漠なる土地を跋行して餌を探むるの犬は圓き瞳を有し灌木に登りてその下なる小さき昆虫或はその上の枝にとまる鳥等を捕食する習慣ある猫は垂直線に非常なる視力を有し只だ側面にのみ視線を向くる野兎の瞳は地平に收縮するなり

動物界凡ての種族中に必ず食肉動物のあるは何故なりや

是れもし一方に於てその播殖を過むるのものなくば多產質なる食草動物は忽ち吾人の要する植物を食ひ盡して饑饉を來たすに至らん故を以て造化は普く食肉動物を生存せしめて以て植物を餌とする動物の過度の播殖を防ぎ吾人の食物に不足を生ずる如きことなからしむるなり

或る動物の眼光の薄暮或は夜に入りて輝くは何故ぞ

光りは金屬に類似せる光輝を有し恰も凹鏡の如き樣にてその開張せる瞳に入りたる光りを反射する眼睛第二網膜より反射するなりこの反射せる光りがその捕んとする動物の上に放射せらるゝものと知らるゝなり

彼等の眼光晝間輝かざるは何故なりや

晝間は瞳孔收縮するが故反射の働きすべき網膜に入る光線の度至て僅少なり然るに暗き處に於ては瞳膨脹するを以て反射の網膜擴開し依て眼光の炫くを見るなり

猫と戯れ居る時彼の屢々振り向きて吾人の手を捕ふるは何故なりや

猫は斯くして原野に棲む彼の同族なる猛獸の性習を表はすものなり彼等は少しく制し難き動物を捕ふる時は前足にて之を抑へ振り向きて速かに後足の爪もてその餌の腹部をかき裂くなり

猫の毛を敏活に摩擦する時電氣の閃光を放つは何故なりや

電氣は凡ての動物躰に通有のものなり英國の或る學者は是を解して生命の一要情態なりと云へり

猫の電氣に關しては摩擦の下に起る閃光の放射は他の動物の毛皮に普通なる膩りたる質に乏しき毛の快異なる乾燥より來るものと知らるゝなり

風雨に先ちて猫の屢々位置を換へ又絶えずその身躰を舐るは何故なりや

風雨將さに近かんとするに當り空氣は電氣液體に充たさるゝを以て猫の毛は忽ち非常に感覺し毛膚荒だちて痒みを感じるなり故に猫は絶へずその躰と耳とを擦りて毛を撫で下ろし激感を減ぜんと力むるなり

猫の流動物を舐るに徐きは何故なりや

是れ犬は液體を舐るに舌の先きを上方に曲げ恰も匕の如き形ちを造りて舐るが故容易に早く口に入るゝを得れど猫は是に反し舌の先き下方に垂るゝが故早く舐る能はざるなり

猫の怪俄する事少きは何故なるや

大抵他の動物にありては生命を亡ぼすか或は甚だしき傷害を受くべき衝突又は墜落に逢ふとも猫は害せ

られずして免るゝを得るよりこの危難より免るゝの特權は主もに關節の軟撓なるに歸するものなり猫の身躰何れの部にても打ちたゝくか或は他物に衝動する時は忽ち彈反し又四足の下部に附着する厚き毛は恰も布團の如く彼等の高所より落ちる時地上に甚しく打ちつくるの憂なからしめ且つ前足の骨の重量は彼等をして眞直に地上に飛び下らしむるによるなり

蒲公英、嫁菜、土筆の料理

春の野に出て摘み採りし蒲公英、嫁菜、土筆の料理はいかに

蒲公英はゆでゝ石の上又は「しつくひ」したる庭などに置けば 自然に「アク」ぬける、又水に浸して「アク」をぬぐもよし、極めて「アク」強きものなれば、十分それを抜かねば食しがたし、浸物などによろし

嫁菜はさつとゆでゝ「アク」を水につけてぬぎ浸物にして生醤油なども面白し

土筆は莖をさり頭ばかりをざつとゆでるか、又は熱湯をかけ浸物さし又よめ菜と取合はすもよし

文藝

誰が罪（上）

竹城生

嗚呼！今宵も已に十二時過ぎとおぼし。今しも瀛笛の高く響けるは、夜行の上り列車が出發せしにやあらむ。次の間の少妹等は熟睡して前後不覺のさまなれど、余は種々なる問題に狹き胸を攪き亂されて寐も眠らず、獨り机に對して悄然たるのみ。寒缸影暗うして月色窓に鮮かに、塒を逐はれて小鳥の羽叩きしながら叫ぶさへ最さびしく聞ゆ。

僂指ふれば早や一とせ餘り二とせに程近き去年二月の某夜のことなり、親しき友許りゆきて更闌るまで談話に耽り、十二時近き頃漸やく辭して其處を立出しか、肌膚を襲ふ北風は骨にも徹らむばかりにて、遙か彼方の

辻の角に、「鍋やき饂飩」と喉を涸して呼ふ聲さへ身に辛く、傳へ來る山寺の鐘の音も大地に凍りつくかと思はるゝ程の寒さに駆られて歩みゆく時、右手の小暗き處より誰やらん細く低き調子にて物言ふあり。余は不意に驚かされて振返り、其方を睨みたるまゝ未だ一言も發せざるうち、ふたゝび「貴紳、何卒饅頭を召して戴きます。甚だ生活に困るもので……」と言へる聲音の哀れに顫へて唧つが如きは、正しく年わかき女子と思はれたり。

「生活に困る」その一句は痛く余を動かしたれども、豫て仙臺といふ處は風儀惡くして俗に所謂草餅なるものの害毒甚しと聞及びたるとあり、今此女子假令さるものに非ずとするも、必定怪しき化生の類にこそあらめとの疑ひ瞬時にして胸を衝き來りたれば、一旦斥けて過ぎんかとまで思ひしも、再び思案したるのち聲かけて、「饅頭は格別欲くもありませんが、糊口のためとならば多少買ふて上もしませう。併し和女は一體何處から斯やつて賣に出るのですか」と問へば、彼方は「當時花京院通りの長屋に住つて居ますが、家には一個の父親が重病でムいまして……」と答ふる言葉遣ひも打上りて此邊の人には非ざるべく、月影おぼろにて其人の姿貌も見えわかねど、賤しきものとも思はれねば、余は胸中の疑團いまだ全く解けざれども一片同情の念禁むる能はず、其饅頭殘らず買ひ取らんと言へば、渠は今まで頭巾を被むり居たりしが、忙はしく之を脫ぎ去りて深謝の意をあらはせり。

其時月は叢雲を排きて隈なく輝きわたりぬ。見れば年の頃十八九ばかり、實にたとへがたなき優秀の佳人なり。敢て紅粉の粧ひを借らず、また黛櫛の飾りを用ゐしにあらず、髮は油氣もなきを手にて束ねたるまゝと覺しく、身に纏へる古綿入は肌寒げにて見る影もなけれど、天然に備はりたる品格は決して之がために汚

されず、一種口にも筆にも形容し能はざる容貌にて、其滿身月の光を浴て立てる姿を見し時に、余は瞬間殆んど渠は天使にあらざるやとの感を抱きたり。

余は一時何と言ふてよきやら夫さへ知らざりしが、纔かて饅頭の代金を問ひて三拾錢と言へるに、懷中より持合せの五拾錢紙幣一枚取出し「剩錢は要りませんから其儘に」とて渡せば、渠は只管之を辭むを強て取らせ、其宿所の番地など委しく尋ね其處より別れて歸りぬ。

家路に違せしは一時過ぎにして、机上の孤燈主人なき



夜を即ち顏なりし。手早く寢衣着かえて布團の上に横はり燈火消して枕に就たれども、何とやらん胸先に物の滯りたる心地にて少しも眠氣萠さず、かくてはならじと思ふに從ひて神經いよ〳〵銳く、途中も種々考へたりし彼の饅頭賣の身の上、さては其姿さへ明瞭と眼前にあらはれ來り、之と同時に世の中の貧富の懸隔に就ての感慨など湧き出で、およそ三時間が程も涙のうちにありしが、果は身心共に疲勞して何時とはなく華胥の人となりぬ。

翌朝余が未だ睡魔の擒となりてある時、少妹露子は枕邊に來り、夜着の袖を輕く引きて起床を促がしぬ。渠

は年齒僅かに十三、疾く父母を失ひ、此の廣き世界に余一人をば杖とも柱ともして頼れり。故に余が日毎の生計は到底人並の滿足を渠に與ふる能はざるも、些しも意に介せず、双親の膝下に養はりて物ねだりするとより他に爲なき年頃にてあり乍ら、たゞ力めて余を慰さめ喜ばしむるのみを以て滿足するものゝ如し。余は折節外に出て心中平を得ざるとありて家に歸るも、一旦渠が滿身の愛を顔にあらはして「兄さん」と迎ふるに接すれば、鬱胸忽ち潤けて何事も忘れたる如く、心地爽かなるを得るなり。

露子は「兄さん昨宵大層遲うムいましたのネエ、ふぢも私もサッパリ知りませんでしたヨ」と言ひつゝ余の手を取るに、余は「ム、眠い〳〵露さんは强い人だ。モウ少し寐して呉れば宜いに」「だつて兄さん規則だから仕方がないぢやないか。兄さん惡魔に誘はれてソンナと仰しやつては不可ませんヨ」「サ、起る〳〵、起るから其樣腕を引張らないでお呉れ、腕が拔けて仕まふから……」

「兄さんモウ六時十五分過ぎましたヨ」露子は斯いひながら机上の時計に眼を注ぎしが、不圖饅頭の袋を見出すや否や、忽ち顔をふり向きてニッコリ！余は言ひぬ、「露さん夫は昨宵のお土產だ」

余は起き出で顔を洗ひ朝飯を了りしところへ、二三人の朋輩來りて、「今日は松島の雪景色見にゆくから是非とも同道」にとて勸めぬ。常ならんには二も無く贊成して我から先に立つなれども、昨夜より饅頭賣がと念頭に往來して、今朝しも渠を尋ね見ばやと思ひし所なれば、遺憾けれど夫とはなく謝絶言ふて彼等を歸しぬ。

（中）

余は家を出で渠より聞ける番地を尋ねて花京院通りに到れり。見れば、實に家と言ふは名ばかり、之にも人の棲るにやと疑はしき長屋の四五棟ありければ、其處

に遊び居たる男兒を呼び「此邊に美浪さんといふ家を知らないか」と尋ねしに、生大根の端を噛り乍ら薄穢なき顔にて余の姿をヂロ〳〵視て居たりしが、何と思ひけん「知らねエ」と言ひ棄てゝ彼方へ走せ去りぬ。余は腹も立しが詮方なく他の人に尋ね問はんと思ひつゝ其處に立ち居たる所へ、手桶提げて出で來りしは渠なり、美浪花子なりき。渠も余を見て驚きたるさまなりしが、急ぎ手桶を其處に置き、走せ來りて挨拶せり。余は、「一寸御樣子をうかゞひに參りました」と言ひつつ渠に導びかれて其家の前に至れば、渠は美くしき顔を火の如くにして「マア汚穢しふはムいますが、何卒お上り遊ばして」と言ふがまに〳〵余も下駄を脱ぎて上つては見たりしが、實に何と言ふべきやうなき憐れなる住居にて、僅か八疊一間と狹き臺處とのみ、其中央には頬骨高く眼肉落窪みたる五十許りの病人、さも苦し氣に床の上に横はり居たり。余は敢て玆に多言せざるべし、彼等は貧民中の最も低き度に於て生活し居れりと言ふの他は。

花子は余に向ひ昨夜の厚意を謝したる後、病人の方に近づき、「阿父さま、此方でムいます」と言ふに、病人も其意を了したりけん、力めて起き上らんとするを余は周章て押止め「どうか其儘にして居て下さい。其御病軀に決して御心配は要りませんから」と言へば、「夫じや甚だ恐入ますが御免下さいまし」とて枕に着しが、身躰を痛く動かせし爲にや劇しく咳して多量の痰を吐きければ、余は、「何御病氣ですか」と問ひしに、渠は、「肋膜炎から肺の方へかゝつたと言ふとでムいます」と答へぬ。「夫は〳〵、して御醫者樣は……」と余が言ひかけし時、渠の顔色變りあやしきもの眼に充ちぬ。余もために動かされぬ。少時ありて「實に此樣な躰裁でムいますから、萬事思ふ通りに參らんで困ります。私の身躰はモウ假令何の樣になつても構いませんが、

たゞ病人をば斯して薄い蒲團を着せ、滋養物は扨置き、毎日のお藥さへも善いお醫者樣から戴くとの出來ないやうな始末、其上夜分物賣に出たあとでは、お湯一つ戴きたくても……」と言ふも聲を吞ての物がたり。聞き居る余も胸詰りて暫し俯向きたるまゝ無言なりしが、軈て、「どうも何から何まで、嘸御不自由などでムいませう。而してお國も此地方とは思はれませんが」

「ハイ、中國で……、種々の事情から方々流浪して、身の耻を人樣に見せまする」渠はかく答へ了りて竊かに其袖口を嚙みしめぬ。

實に、聞けば言葉振といひ擧動といひ、由緒ある人の零落とは察せられたり。余は數次言ふ如くなれども、渠は眞に美なるものなり。渠は余が如何なる方法を以てしてもあらはし得ざる容貌を有せり。然るに是程の女をして、夜な〳〵情を知らぬ寒風に面を曝さしむるかと思へば、貧てふ魔力の大なるには余も心竊かに舌を捲けり。

余は種々と慰め聞えて、晝の間は何して暮し給ふかと尋ねしに、足袋の底刺をなし些許の賃錢を得て生活するとて、「この通りでムいます」と右の掌を差出すを見れば、無慘や、拇指の腹は針の頭の痕にて疵となり、黑く血を寄せ居たり。

「マア何事も運でムいますから、餘り御心配なさらぬ方が宜うムいます。私も折々伺つて、何かまた役に立つやうなことを致しませうから」余は此言葉を遺して一旦其處を辭しぬ。

余は渠が現在の境遇を見、また其の語るところを聞きては、到底默して止む能はざりき。されど己れも格別餘裕ある身ならねば、歸り途に間野文學士の許を尋ねて、事情を逐一語りたる上、何とか救濟の方法を講ぜんと心を決めたり。余は從來同氏と深き交際もあらざれど、夫婦とも熱心なる基督敎徒にして慈善事業に力

を盡すよし豫て聞たれば、唐突ながら推參して間野夫人に逢ひ、此事を物語れるに、夫人は丁寧に余の言ふ所を聞き了りて、「夫では私は午後から其方を見舞つて上たうへで、何れ貴方をもお尋ねして御相談いたしませう」と言はれたれば、余も太に喜び幾分か心を落着けて家に歸りぬ。

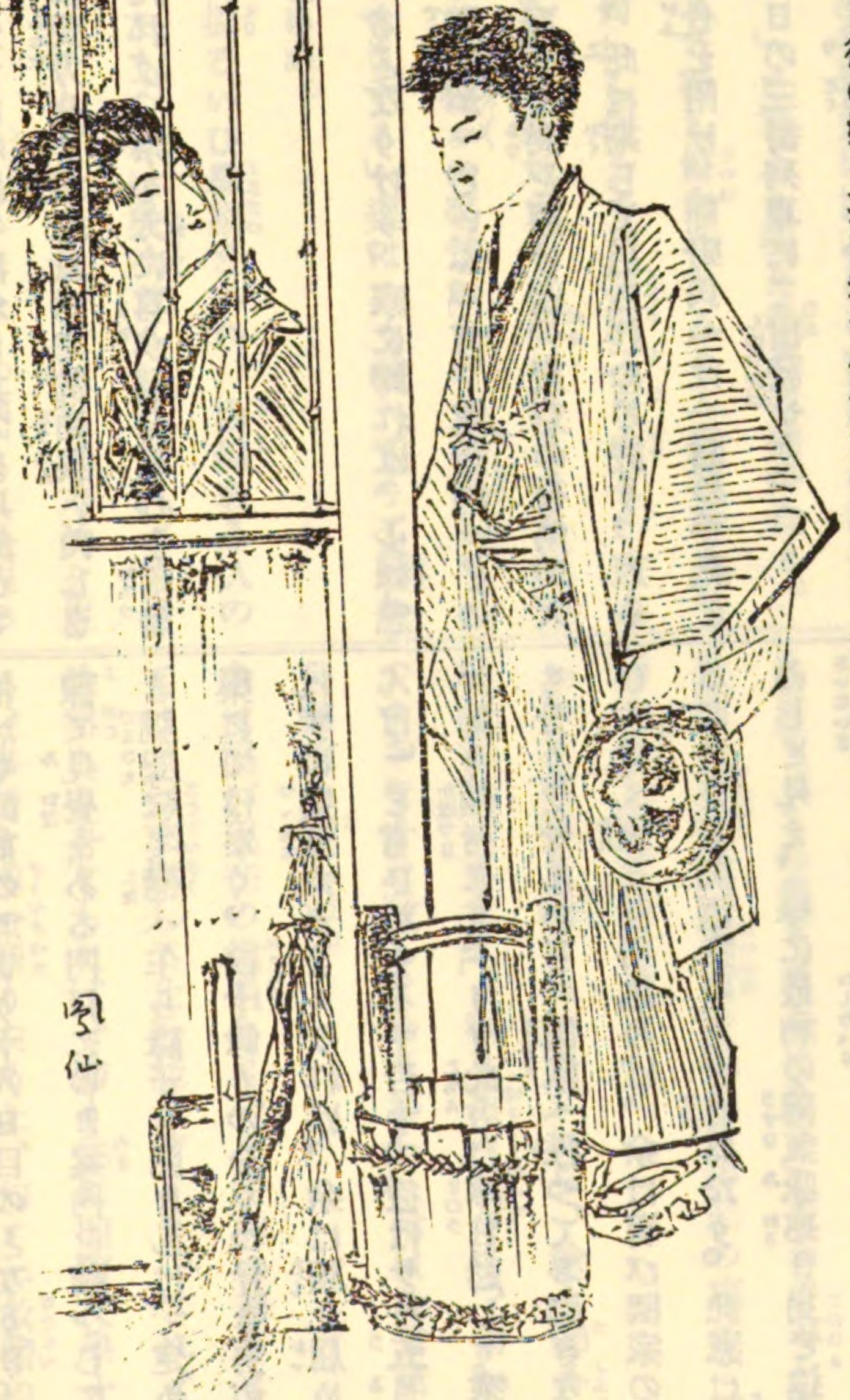
（下）

意外！實に意外なることなりけり。家に歸れば、少妹急ぎ迎へて「兄さん電報が」といふ。「何。電報が」との鸚鵡返し、直に受取りて封を開けば、東京の舍弟が大病なりとの報知に、此は斯して居られぬと許り、取るものも取り敢ず都合を附け、間野氏へは一封の手紙を遺したるまゝ、其日の三番列車にて出發せり。

脚氣衝心にて一時は危篤なりし舍弟の病氣も、療養其甲斐見えて、余が到着せし一週間の後は、醫士も「是ならば」と保證たれば、余も心を安んじ後の事は親友の人々に托して歸りしが、夫や此やにて殆んど二週間程も費やし、彼の花京院通りの美涙を尋ねてゆきしは、恰かも此前の時より十八日目のことなりき。

豫て見覺えある門口にゆき案内を請ひしに、裡より太き胴聲にて應へ乍ら障子を開きしは、定めてと思へる渠にてはなく、四十餘りのむくつけき男が、何をも言はずに突立たるまゝなれば、余は腰を屈めて「美涙さんは」と言ひかくるや否や、彼はサモ五月蠅しと言ふが如き顏付にて「イヤ此方は昨日越して來たもので何も分りませんから、隣家へ往つてお聞きなさい」と言ひすてゝ夫なり引込めば、余は再び隣家の木村といへるにゆきて美涙家のことを尋ねたり。此家は以前より住ゐしと見え、殊に最初の薄氣味惡き男と違ひ、萬づ如才內儀にて、少し多辯なれども、これはた美涙家のことを聞取るには便よかりしが、併し聞いて見れば案外なることのみ。「彼の娘は親孝行で、柔和くて、長夜中賞ぬ

ものもない位でしたが、ひよんな間違があつて、十五六日前でもありませうか、警察へ引かれて往きました」が抑々にて、「どうも彼の娘も悪い考で仕た譯でもありますまいが、仕方ないことで、饅頭を持つて出た晩、途中で紙入を拾つて中を見たら、大層なお金でしたから早速届けやうとは思つたが、其處が情ないとで差當り父親が大病で居たもんですから、其中から少々許り出して、何か買つたり、お醫者さんを呼んだりしたのが知れて、直ぐに拘引されて仕まひました」との事譯、余は呆れたる口を塞ぎあえぬばかり、内儀は倘ほ、「マア彼の娘がソンナ始末ですから、私が往つて父親の世話をして遣りましたが、父親も非常の力落しで、唯モウ泣てばかり居ました。すると其翌日の晩でしたが、間野と仰しやる立派な奥樣が



お出て種々とお話をなされて、之も時の災難だから斷念て、マア斯して居るより施療院へ入つた方が宜らうと仰しやたのを、父親は、私も今は斯やつて零落ては居ますが、元は些は由緒のあるもの、夫を施療院などへ入つては先祖へ對して濟みませぬと言つて、容易肯きませんでしたが、私も共々勸めて聞せて、とう／＼入ることになりました」と語りぬ。これにて余の知らんと欲することは殘らず、聞き得たれば、之よりは間野氏を尋ねて其後のことを聞かんと思ひ、「有がたうムいました。大きにお邪魔で」と其處を立去りたれども、殆んど身は夢中を辿るの感ありき。

間野夫人は如何にして余と約せし日に、美涙をば尋ねざりけむ。若し夫人にして其日花子を訪ひたらんには、或は斯ることの生ぜずして濟たらむも計り難きに。

夫人は其日車に乘りて家を出でたりしも、知己の人に出遇ひて時刻を移し、終に途中より引返せしが、其翌日は安息日なりとて會堂の外、何處へもゆかず、月曜の夕方に、はじめて花子の拘引せられたる後へ尋ね到りしなりと。此事は間野氏を知れる余の友人より聞し所なり。

余が間野氏を訪ひし時には、花子の父なる美涙求馬が施療院に於て死亡しより今日にて五日目なりと、夫人の物語られぬ。余は慈善を以て消閑の業となすが如き人に對し、不滿足を抱きて匇忙にして歸りぬ。

可憐なる花子は、其後間もなく放免されしと風の便りに聞きしが、渠は其身に耻たりけむ、終に今日まで顔を見せず。されど余の胸裡には渠を賤しむの念慮毫末もなくして、唯、天使とも見つべき渠を記憶するのみ。

嗚呼！渠は今何處の空に在るとやらん。・・・・（完）

野蠻人の美人法

歐羅巴アビシニヤ國の婦女に皮膚の色を白くする爲めには非常の苦心と堪忍を毀すを常とす而して其法も亦た甚だ奇妙にして一種特別

の新法なり今其大畧を述べんに婦女にして自身の身体の色を白くなさんと欲するときは先づ一室を撰びて此中に三ヶ月間閉居し毛織の布フランケット様のものにて身體の全部を包み僅に頭を表はして呼吸するの便となすのみ偖て婦人が斯くケットにつゝまれて横に寢たる儘に休息なし居る間に介抱人は日々其傍に來りて一種の香木の枝數本に火を點し其煙にて婦人の身体を包みたる上より薫するなり三ヶ月間の薫蒸を終れば皮膚の色は全く白くなり雪を欺く程の美人に化して閑室を出來るなり然ども此法は婦女の健康を害し其精力を衰弱せしむること一方ならざるが故に婦女が幽閉中は家族の滋養の食物を團子となして日毎に室に來りて之を彼れの口中に投じやるは恰も養雞を肥すに異ならず斯くして彼の氣力を維持せしむと云ふ三ヶ月間の坐床、沈默、身体の不自由等を堪へるには餘程の困難なるべし

談叢

北極探險の成功

楓葉

◉北極探險の成功（二月十五日倫敦ロイテル發）

アーチエンゼル駐在の英國領事は、曩きに北極探險の道に上りしナンセン氏が、首尾よく北極に達したる後ち、歸途に上りつゝある旨を電報したり。

右の電報いよ〱相違なくば、開闢以來未だ人間の足跡到らざりし北極、此に到らんとして幾多の勇者が落命したる北極は、ナンセン氏によつて初めて人間の版圖に入りたるものと云ふ可し。

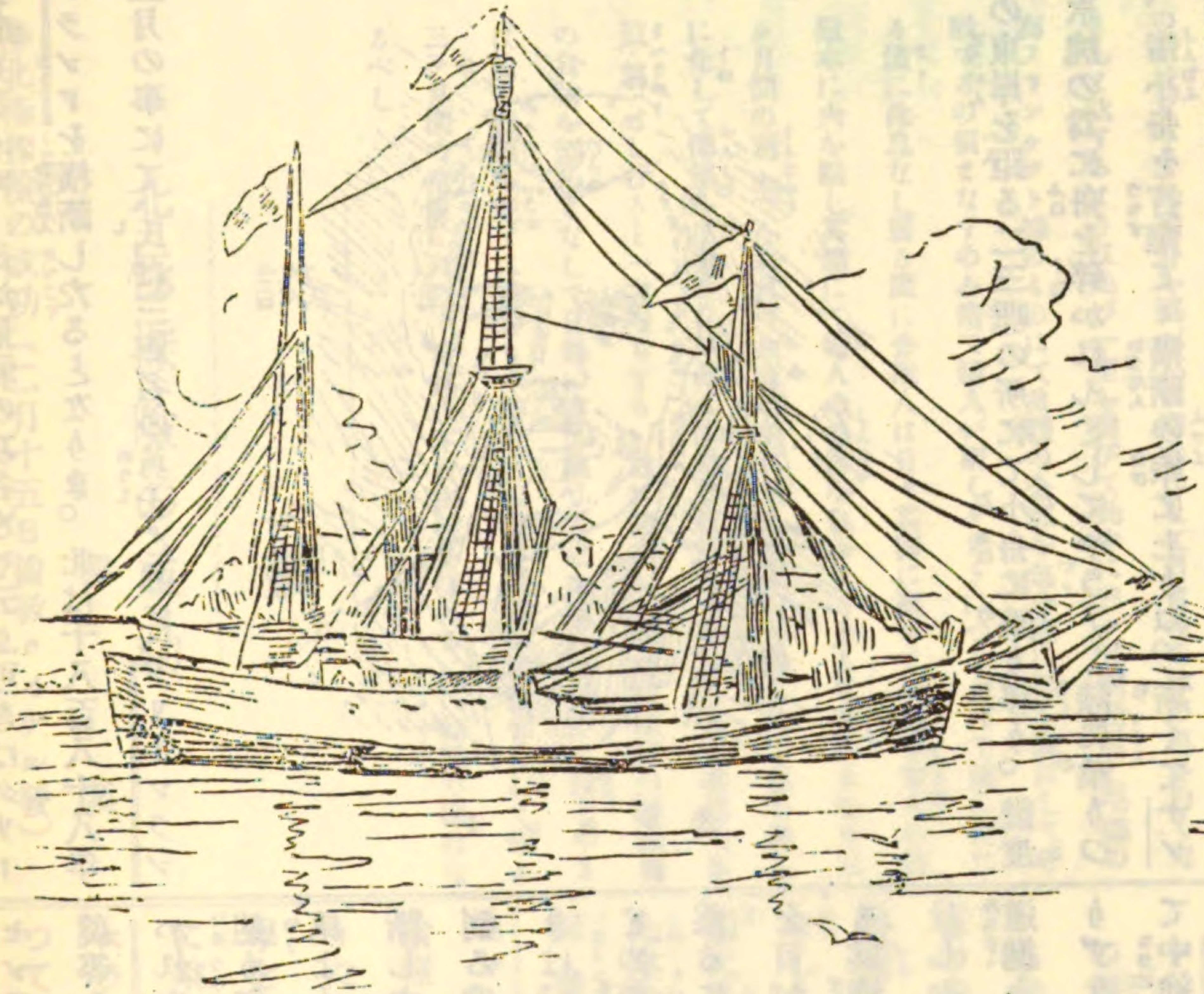
此空前の事業を成就したるドクトル、ナンセンは、諾威の人にて、當年三十五歳の壯年なり。國都クリスチアナの近傍の農家に生れしが、生來活潑にして冒險様の事を好み、幼なき時より氷滑りが大好物にてありたり。偖長じてはクリスチアナ大學に入りて、動物學を修め、寒帶動物研究の爲二十二歳の年一葉の漁舟に乘じてスピツベアゲン海に航し、夫れよりまたアイスランド グリーンランドの間に航し、勤勉の効によつて博士となり、次でクリスチアナ大學の比較動物舘

監督となりぬ。氏が最初の功名とも云ふ可きはグリーンランドを横斷したることなりき。此は千八百八十八年五月の事にて、氏は三四名の勇士と共に、グリーンランドの東岸を距る二三哩の所にて小舟に乘り移り。幾度か氷塊の爲に舟を碎かれんとしてやう〳〵陸に乘りつけ、偖小舟を打棄てゝ横斷の旅に上りぬ。斯くてナンセン氏は肉、ビスケツト、シオコオレート、珈琲、肉羹等を生命と賴みて、面を吹き裂くばかりの寒風に吹かれながら、漫々たる雪氷の野氷雪の山を橇牽きつゝ辿り行き、夜は帆木綿の下に眠り、千辛萬苦を經て首尾よくグリーンランドの彼岸に出でたり。此寒地を横斷したる者實に氏を以て始とすることなれば、其名は到る處に轟き、其著述「グリーンランド旅行記」の如きは、夥しき賣高にして、近來珍らしき面白き書物との評判甚だ高かりき。



ナンセン氏

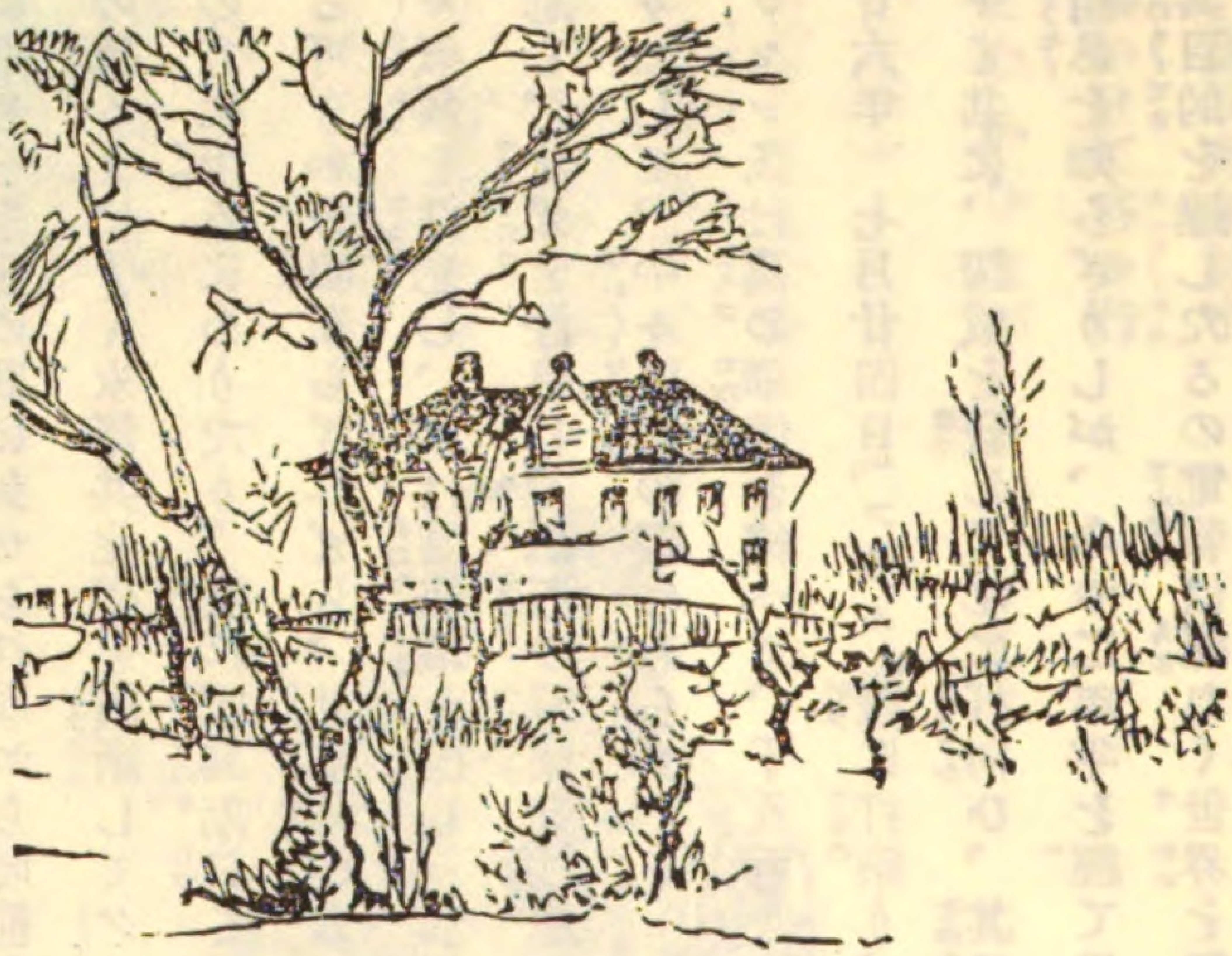
然るに、ナンセン氏は此に滿足せず、更に大なる事業を目がけぬ。北極探險の事是れなり。元來北極は、恰も其清淨潔白なる聖地に塵埃紛々たる人間の足跡を着けしむるを欲せざるもの丶如く、航海の術開け學問の道進みしより、幾多の豪勇なる經驗博識の士が續々懲りずまた探險の道に上りしと雖も、或ものは故障あつて中途より引き返へし、或ものは船破れて企も共に破



れ、或ものは人ながら船ながら氷雪の中に埋つて千載永く消息を聞かず。誠に北極探險は到底成るまじき事、北極は到底達す可からざる禁地の如くなりき。然るに此に一の望と云ふは、其頃は千八百七十九年「イスアンチット」と云ふ船ベーリング海峽より北極を橫斷して歐洲に來らんとして難破したるが、三年を經て其船の乘組員の遺物に相違なきもの、氷塊と共にグリーンランドに到着したるの一事にて、右によれば北極地方には未だ人の知らざる一の潮流ありて、之を利用すれば或は難なく北極を橫斷して歐より亞乃至亞より歐に達するを得可しとの說專ら學者間に行はれぬ。幸にも諾威內國博覽會は北極探險の爲二十萬クロネルの金を支出し、探險の事はナンセン氏に托しければ、氏は一も二もなく喜んで領

諾せり。

偖北極探険について、最大必要の問題は、船の事なり。



ナンセン氏の家

ナンセン氏が工夫を凝らして出來せし「フラム」號は、八百噸の船にて、長百二十八呎、幅三十六呎、三本檣にして、中央の檣は甚だ高く、水面上百〇五呎の邊に遠見塔あり。帆走船の仕かけなれども、二百馬力の蒸滊關あり。一躰に幅廣くして形狀恰も鉢の如く、此なれば氷塊氷野の間にありて、氷押し寄せはさまるゝことあるも、上へ上へと浮上りて、緊しく氷に閉さるゝの患なし。船には廣間一、客房八あり。天井と壁は甚だ厚く、間に馴鹿の毛やなめし皮やコルクの屑をつめ、暖を保つまた濕氣を避くるの用に供す。また散步の用として、甲板には厚く大なる天幕を張り、廣間の壁には諾威の名畫工等の描きし故國の風景あり。書籍も澤山、色々の遊道具、オルガン其他樂器の類をも備ふ。六ヶ月も續く冬夜の寂寞を慰めん爲なり。また食物は、あらゆる鑵詰肉、煮或は燒き或は乾せし牛肉、羊肉、兎肉、豚肉、鑵詰の魚肉、其他あらゆる食物五ヶ年分を用意す。天幕は絹糸にて織りなし、極めて輕きものなり。北極地方の旅行には、何物も輕きを第一

とすること無論なり。此外科學器械大小寫眞器械は云ふ迄もなし。ナンセン氏の目的は、船を西比利亞の北邊に進め、氷雪の間に封ぜられながら時節を待ち、潮流の導くまに／＼氷諸共北極を横斷してグリーンランドの方に下るにありたり。然れば其期日とても何年になる可きか分明ならざれども、其事業と云へば、時々刻々氣候を注意し、氷は其組織を撿し、氷下の潮流を注意し、北光を注目し、磁石の變動を注意する等頗る多々にして、中々退屈の暇はあらず。

ナンセン氏は萬の準備を終へて、千八百九十三年（明治廿六年）七月廿四日「フラム」號に打乘り、十二名の手下と共に、諾威を發して北に打向ひ、其後杳々として消息を知らざりしが、今や二年半を經て氏が首尾よく其目的を達したるの電報は遍ねく世界を驚かしぬ。氏が經過は未だ分明ならざるも、多分氏は八九月の交氷の歐亞の岸を離るゝの時に乘じて西比利亞群島の邊に到り、此處に氷雪の間に封ぜられつゝ、時節を待つて潮流と共に北極を過ぎりしものなる可しと云ふ。兎に角彼電報眞ならば、ナンセン氏は千載不朽の名を世界の名簿にとゞめたるものなり。

ナンセン氏が細君は、氏が北極行の少前に結婚したる婦人にて、尤も音樂に長じ、また氷滑りの技に巧みに、夫と共に故國の雪山氷嶽を事ともせず攀躋したる程の活潑なる人なりと云ふ。ナンセン氏が北極に赴くや、夫人は忻然として夫の壯擧を賛し、夫の留守中は啻に仍て家にあつて音樂を敎へ居たり。彼夫にして此妻ありと云ふ可し。

瓶中の黃金（下）

金子春夢

赤西林藏が所有家なる三軒長屋も四五人の消防火の手にかゝりては麻殼細工を毀すが如く正午頃までには大

略取りこはし最早材木の取片づけとなり、蚤取眼で諸方を何やら探し廻し居たりし林藏は午飯に立ち歸りぬ、消防夫も材木に腰かけて各々行厨をつかひながら、

×「オイ三公あの禿頭爺を見や、己達が仕事でも怠慢かと思ッて、始終側にくッ付てらァ、己ァ蟲から嫌ひの故か奴面を見るも忌々しいといふ事よ

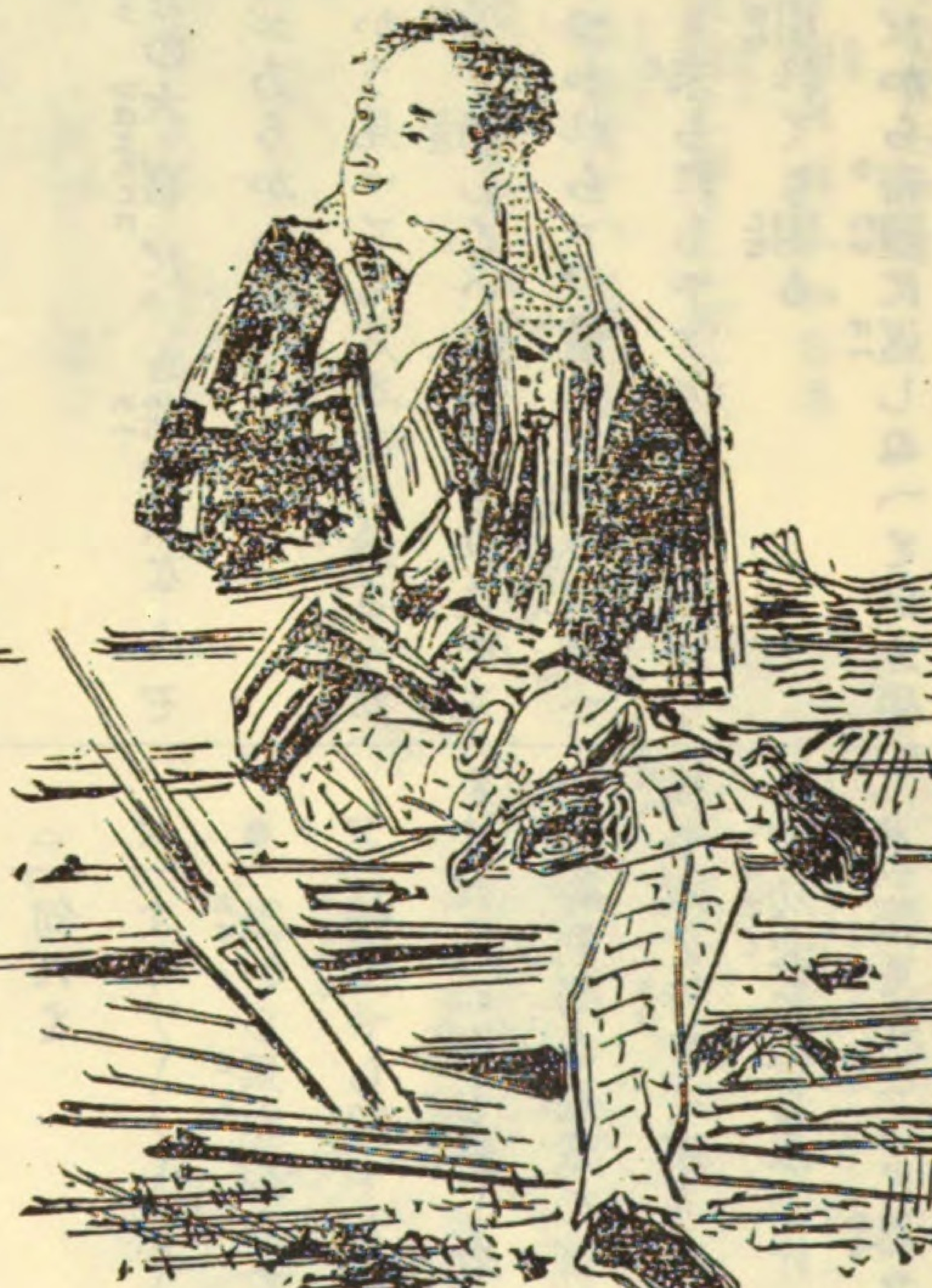
●「あんな小八釜しい奴ァ世界に二人たァあるめへよ、日本人にもあんな奴があるからナ、餘まり威張れねへ、

△「所が己見たやうな新日本の好男子があるからナ、差引すれヤまだ餘剰が來るワァハハハハ

●「三公一躰新日本たァ何だい、新平民の親族だらう

⊠「ナニサ新聞からでも覺えたらう、柄にもねへ事だ

△「いやにませッけへすない、博學多才の好男子たァ己様御一人様だ



●「なァるほど御一人様五十錢餘計な散財を懸けま

せんといふお前の面だ、アハハハハハ
×△⊠「アハハハハ
⊠「どうしたんだ、爺奴來やァがらねへ、卒中でゝもくたばッたか
△「さうなりやァ諸方の大喜だ、お前の所なんぞもまだ一兩二分の借があるからね
⊠「馬鹿にするない、かう見へても六本木の豢さんだよ、あんな奴の金へ借り倒しといたら、それこそちゝむせへ幽靈にとつつかれらァ、借した金へ返せへなんて、引窓からでも來られちやァ大變だ、だが今日の骨折をそれで差引れても困る
△「そらさうだらう、だから奇麗に返しねへといふ事よ、差引れて困るやうぢやァお前卑怯だ
⊠「何が卑怯だ、手前生六な事を利くナ、あんな極道の金錢を借り倒したッて搆ふものか、手前彼奴の事をいやに贔負するからにやァ彼奴の濁六でも喰らつたナ
△「何しに濁六を喰らうものか、手前が生意氣だ、
⊠「何だと
△「何だと
×「オイ〱〱〱、來たぞ、爺がやつて來たよ、
●「後から馬鹿が來た、長公がついて來た。
⊠「鶴嘴やら鍬やら持つて來たぜ、何をするだらう

とくだらぬ事を話し合ふ折柄、林藏先に立ち町内で馬鹿の評判高き長藏と言へる三十恰好の大男をつれ、鶴嘴や鍬を持せて來りぬ、林藏八方に眼を配り、ジーッと消防夫をにらみつけ

林「誰も見ないと思ッてまだ仕事にかゝらねへ、己ァ大きな眼があるぞよ
△「眼がなけりァ海鼠だ
林「何だと、も一度さう言つて見ろ
△「ナニサ明日は天氣でごぜへやす

林「さうかそれなら好い、何でも天氣でねへと、第一貴樣等が食ふに困る

又「餘計なお世話さ

林「箆棒奴、いつも世話になる癖に

皆々「へイ〳〵左樣でござへやす

林「もう貴樣等にやァ用はねへからさつき歸んねへ、今夜米代を取りに來な、熊公にやァあれから差引だぞ、竹公にはまだ五百ばかり殘つてるから、さう思つてろ

と林藏は何故か消防夫を追返し、馬鹿の長藏と二人となり、長藏にあすこ此處と命じて地盤を掘れども、八幡樣の正夢なる例の大瓶は三時頃まで見出さず。

馬鹿の長藏は屢々腕もて瀧なす額の汗を押し拭ひ一心不亂鍬に力を入れて東の一隅を掘りつゝけるが、カチ



りといふ音に鍬の手を止め、また振り上げて柔に其部の土を起し見るに大瓶の底は天に向ひて埋もれり、

長藏大聲を擧げて

長「大屋さん、有つたよ、こゝに瓶が、瓶がよゝ早く

來ねへ早く來ねへ
と呼び立つる聲に彼方の隅に鶴嘴に老の力一ばい振り立て何を言つても聞えぬ林藏が、急に此方にふり向き、
林「長藏、瓶が目つかつたか
長「ア、目つかつたよ、早く來ねへよ
林藏は握り固めし道具を投げ捨て、一散に駈け寄り見るに果せるかな、大瓶の底歴々と顯はれあり、林藏三度ばかり雀躍し、早く急げ／＼と長藏をせき立て自分も元の所に取つて返し、鶴嘴を持ち來り、二人にて力を戮せ瓶に添ふて地中を掘り、終に大瓶を掘り出しぬ。
掘り出したる瓶を起し見るに、口には醬油樽の鏡のやうなるものにて堅く蓋しあり、林藏地上に跪き、南無八幡大菩薩、冥助の程有りがたし／＼と、額を泥土に擦りつけ幾度か拜禮し、さてこれからが黃金の山なり、どりや本尊の顏を拜まんと蓋に手かけしが、
林「まて／＼、馬鹿でゑこんな時には油斷がならぬ、一顆でもちよろまかされちやァ不可々々、う丶よし、よし、オイ長公、あそこのな、井戸側に行ッて、可といふまで此方を向いちや不可よ、よしか、よしなら早く行け
長「ア、いゝよ
と馬鹿は彼方に走り行きて前向を見て空を眺め居る、林藏は旨い／＼と恭しく瓶の蓋に手をかけしが、蓋堅固にしてなか／＼開くべくもあらねば、心焦立ち、有り合ふ鶴嘴もてたゝき毀せば、こはいかに山吹色の黃金にはあらで、菰に包みし人間の死骸、而も生々しき首が、林藏が鶴嘴の力に瓶が倒るゝ途端にニヌッと差し出でぬ。
林藏アッとばかりに飛びしざる拍子に後の石塊につま

づきドッサリ仰向に引くり返りて起きるも得ならぬ輿驚の有様は何ともかとも言はれざりけり。茫然立ち居し長藏は此物音に驚きて林藏の側に馳せつくれば、林藏は目をパチクリ〳〵、動かして身躰は死人も同前、ちつとも動かず、馬鹿男は此光景を見て大屋様が死んだよ〳〵と指をさして笑ひ居る。

此話は決して架空の諷誠小說にあらず、本年二月起りし出來事なり、たゞ姓名と場所を替えたるのみ、其近所にては浮ばれぬ死人が林藏の夢枕に立ちしならんなどゝ評判しけり

十二の油斷

（一）大そうな天か心と氣もつからず勘定づくは餘り小さし
（二）アイ〳〵の素直は得手でありながら强情を言ふ蟲の居處
（三）はら〳〵と物の分るはよけれども力身と引ぬ氣唐散財
（四）延す故其返報に延さるゝ遲れて來れば間に合はぬ運
（五）餘處に見て危き事を好むなり詞の劔諸人を切る
（六）辟するも嫉みも狹い藪なれど殊によりては大器大用
（七）打解て語る咄に油斷すな洩らしてならぬ事もあるゆゑ
（八）氣の毒も氣の毒でない氣の毒を氣の毒と云人ぞ氣の毒
（九）眼にとられ耳に取られて動くゆゑ据らぬ筈よ腹の一心
（十）算段の上手過れば心得よ、有に任せて捨られぬ智惠
（十一）身にかへて萬事理窟を張るものは他人には義理、血筋には不和
（十二）後も見ず左右をも見ず進むのは唯一色により過ろゆゑ

家政

小供の躾方につき　ＫＫ

干渉の時代過ぐれば放任の時代來るも自然の理にて、殊に忙しき家庭などにては、父親は外の仕事に汲々と

して、母親は家内の雜事に眼のまはる程いそがしければ、小供の躾方とてもおろそかにするとはなしに何時か扱目勝になり易く、時々叱りもし、言ひ聞かせもすれど、何分親の精神十分に小供に徹せざるの患あるものなり、此は實に注意す可きものにて、言ふまでもなけれど、親たるものはよく〳〵心に考へ、何が尤も大切なるかを慮り、十分に面倒を見て、煮豆の焦つくからとて小供の癖事を見のがし、調べ物の急しき故とて「お爺さん、是なあに？是なあに？」と、繪本携へて頻りに問ひ來る小供を五月蠅しと叱り飛ばす樣の事ある可からず。必ず小さき事とて等閑にす可からず。春の野山の青み渡るも一莖の草の集まれるにあらずや。發句にも「子に饜くと申す人には花もなし」とあり。

四五十年前の事とか、英國倫敦の寺院の大敎正某幼なき皇女達の信仰箇條問答を試驗せしに、いと〳〵よろしき出來なりしかば、「御傅母殿の丹精が思はれます」と挨拶したりしに、皇女達は「否々、傅母ではありません、母上に敎はつたのですよ」と答へられける。また或時今の獨逸皇太后（即ち英國女皇の嫡女）猶二八の少女なりける頃、母上と共に馬車にて觀兵式に赴き玉ひけるに、皇女は扈從の壯年武官等に色々話しかけて、母上の横目にて諷し玉ふも一切搆はず終にわざと手巾を車の外に落されければ、武官共は先を爭ふて之を拾ひて奉らむとせしに、女皇は之を押とめ、きつと皇女に向ひ「御身の落した手巾なれば、自から拾ひ玉へ」と宣ひければ、皇女は赤面しつゝ馬車より下りて手巾を拾はれぬ。斯く女皇は子供の躾方に身を入れてせられしのみならで、皇婿アルベルト親王は近來無双の賢君子に在しければ、子供の敎育にも心を入れらるゝこと尋常ならず、或時まだ年若き皇太子も馬を並べて公園に散歩せられけるに、道行く人立とまりて拜禮せしを、氣つかでや皇太子は馬を早めて打過ぎ

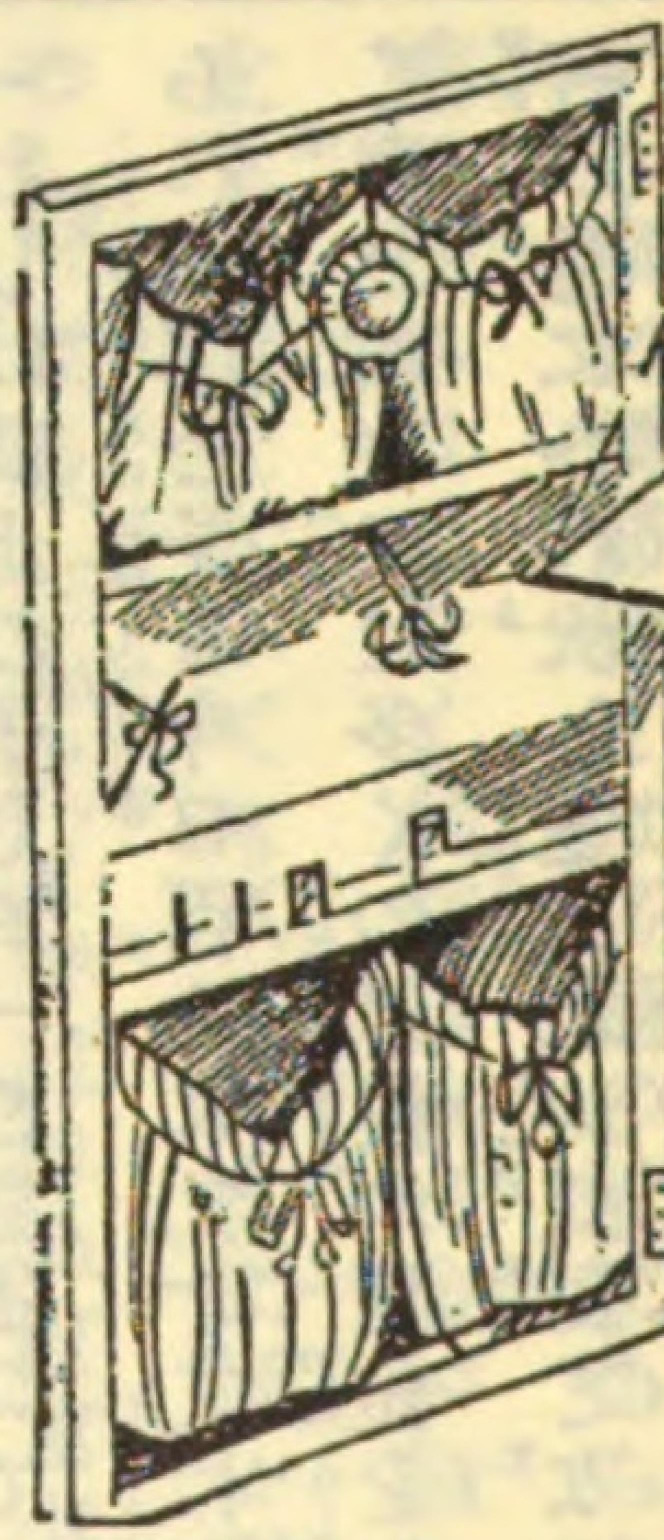
られしに、父アルベルト親王はきッと皇太子に打向ひ、「坊、彼紳士に答禮して來よ」と嚴重に云はれけるにぞ、太子は馬を返へして其紳士に謝せられしと云ふ、斯る敎育ありたればこそ、獨逸の皇太后と云へば泰西婦人界に錚々たる人物にて、太子とても人に對するに禮を失はぬ儀容嫺雅の人とはなられしなれ。

便利屛風

仝

婦人方の居間に備えて、用多く而も裝飾となるは簞笥鏡臺のみならで、此屛風なども其一なるべし。糸入、針指、針箱、手箱、机の用も此屛風一つにて事足り、其便利なる事は構造を見て知らるべし。

縱三尺横一尺八寸の二つの框を造り、外側より丈夫なるきれにて掩ひ、內側の四隅にて奇麗なる釘もてとめ、屛風樣に組立つ。さて兩方の框を各三段に分ち、上下二段には着物のおとし見たやうに奇麗な丈夫なる切（絹ならば上等）の袋をつけ、糸、針指など好みのものを入れ、また上縁に釘うちていろ〳〵のものを掛く。中段には切を貼りたる板二枚をとり、一枚をおとしのやうに紐もて框に結付け、他の一枚を上より蓋ふやうにつけ、上縁の兩端にある釘より紐を下げて開閉を自在にす、紐をかくれば棚とも机ともなるなり。かくの如くいろ〳〵のものを手輕に屛風一つにまとめあれば、輕便なる事はいふまでもなく、部屋の整頓上誠によろし。



水はき

仝

家の衛生に尤も大事なるは水はきのよしあしにて、此は兎角等閑になり易きものなるが、其人間に及ぼす所は恐ろしきものなり、博士コルフイルド氏の言によれば、

咽喉加答兒　ヂフテリア　産褥熱
肺炎　腸窒扶斯　痢病

等の諸病は多く水はきの工合悪しきより生ずと。此頃夥しく流行する感冒の如きも、或は此等の事が一の原因となり居るやも知れず、新聞の報ずる所によれば、横濱には已に恐ろしき黒死病の襲來せしといひ、是より次第に暖かに且つ雨多き時節となれば、色々の病の種はどぶやながしの邊より限りなく立上ることとなれば、一家の主婦たるものは清潔の上にも清潔を旨とし、別して臺所を清淨にし、水はきに注意し、一家の衛生に注意す可き事にして、別して小供老人ある家は此に注意すること尤も肝要なり。

主婦となり居る妹に（二）

松ヶ枝

「わしは武士の子じや」と意張つても金がなければ通られぬ場合多き今日百人に九十九は必ず金を慾する事と存じ候中には多くの風俗が黄金を思ひ過ごして是を拜み是にひれ伏し遂に之が奴隷となるのさもしき有様を厭ふより「己れは金は要らぬ」と申さる丶潔白なる方も聞き及び候へど實際金錢は大切なるものに候之に使はるれば樣々なる恐ろしき害毒起る事多く候へど己れ主人となりて賢明に之を用ゆれば誠に慾くべき務め

を致し國家に莫大なる益を與ふるものに候殊に今日外國と交際致す場合に當り國富まざれば思ひ切つたる事業はなし難きかと存ぜられ候國の富とは一家の富みの積み重り候ものにて一家の富は主婦たるもの丶心得次第にて案外に左右せらる丶ものに候もとより一家の財源は主人の腕の働きより來るものに候へども如何によく主人が働けばとて妻たるもの不注意不心得にて締りなければ主人の苦勞して得たる金は水の泡の如く空しく消え失する者に候一國の興亡は一家の隆廢より及ぼし來り一家のねせ興しは妻の良不良に係る事多きものと推考いたし候時は各一家の妻たるもの丶責任恐ろしきほどに候主人の得來り候金を如何にしてふやし如何にして費し



必要は發明な生す

申べきか是れ誠に主婦たるものに深く思考いたすべき事に候或る主婦は何か內職して幾干の金を儲くる人も之れ有り候へどもよしや內職をなし能はぬ人にても金を儲くる方法之れ有り候即ち金を儲くる方法とは節儉する事に候節儉とは吝嗇の故にあらじ候間意味御取り違ひ成されまじく候或る人は金が欲しさに凡ての義理を欠き禮を欠いても爪を掃木に精々勤勞致し或る地方の諺なる「三年犬と呼ばれねば富者とはなれぬ」と申事を服膺して人の爲め公益の爲めなどには一厘の金錢も惜しみて出さじ只だ金々と一生懸命金儲けの工夫致しやがて儲りたる金錢は自己の肉慾の爲めに費やすものなか〳〵多く候へどいかに淺間しき次第に候はずや三年犬と呼ばれ居るうちに死に失せ候はゞ如何に候べき人間が犬となりて死ぬるとはなんと恐ろしき事に候はずやかく申さば何が實際外の空想もて人を攻むると御考ひなさるやも計られじ候へど今日の世の中內心犬

否犬よりも劣りたるものとなりて死に居る人多く候節儉とは決してかく慈善をせじに金を儲けよとの事には之れ無く候

金を儲けたしと申も結句國家の爲めに大に致し度き存念より來る可き事と存じ候

付て職業なき主婦が金を儲くるとはその戸内にある些細なるものに注意して廢物をも利用するの點に之れ有り候

一、何れの家にても婦人の居る以上裁縫ひせぬ家とてなかるべく裁ち縫ひ致し候以上は常に幾何の小なる布切れ糸はゞなど出るものに候が五寸三寸の糸はじ布きれなど「こんなもの」と申て掃き捨つる女あるものに候然してこゝが最も愼しむべき處に候これを捨つるは金を捨つるにて之を貯ひ置くは即ち私の申無職業なる主婦の金儲けの術に候三寸五寸の糸その時にこそ用なきやう見ゆる事もあるべけれ藏し置かば後日必ず用に立つものに候それ故何が一枚の紙を取りて三德の如き形ちにたゝみ針箱の中に入れ置くか又は小袋を造りて部屋の隅にかけ置くか致し一條の糸きれにても落ち居る時は必ず拾ふてこの中に入れ朝夕の掃除のときも注意してきたなき紙は屑籠に入れ未だ不潔ならざる紙ならばのしてたゝみ置き布切れは又矢張り小袋か小箱に入れ置くやう成さるべく候毛糸の小さきはしも積れば一つの靴足袋ともシャツともなし得るものに候ぬき糸にても積れば幾枚の衣服を縫ひ能ふものに候小さき布切れはこのぬき糸もてさまぐ\にはぎ合せ小袋となすも得べく多く積り居らば一枚の胴着を仕立つる事も出來申候


（二）
必要は發明を生す

一、戸内の物は何にてもその置き所を定め置くやう成さるべく候一定の場所なければ常にそちこちと探索致し候に時間も費し物品も爲めに紛失せる事あるものに候袋をこしらひて小さきものはその中にまとめ入れ置き候事至て便利よく又整頓するものに候、

一、金を貯んとせば身分不相應のものは御求め成れまじく候八圓の給料取る夫を持たばその八圓にて借財なしの生計を營むやう意を配るが主婦の賢智に候金を借りても縮緬の羽織を着たしと夫にすがり望が叶はぬとて頬ふくらす事女の能にもあるまじく候、

（三）



必要は發明を生す

一、夜更しする事は愼むべき事に候不健康不經濟の源に候

一、經濟は大所の事大に關係致し候人數時候その品の何たる等に付無頓着に料理いたし候はゞ必ずあまり出で申べく遂に徒らに捨つるやうになる事あるものに候よく注意肝要に候、

一、金を儲けんとせば必ず返濟の見込みなき金錢は必ず借らざる事を心がけなさるべく候金を借るれば利子より利子と大なるものに成り負荷に候、

私の友人に五十餘萬圓の富者之れ有り候田舍にて林の近くに壯大なる家を建て長者と尊ばれて裕富に暮らし居り候にその人の母六十の坂路三つ四つ越し候が毎朝早く裏の林に出で綿布の衣を褄とりつ落葉を拾ふ事自分の務めのやうに致し候故家内の人々怪しみて問ひ候處答へて「私は年を取つたから昔のやうに働かれぬそれ故この落葉を拾ふて積んで幾俵ともなし燃え付けの用に供するのです」と申され候、僕婢等感じて大に節儉の風一家に行はれ家は益々隆盛に相成り候、

無用の費を省きて廢物を利用する是れ富を致すの方法に候、よく御注意肝要に候、

家政と裁縫

恕哉

一家の主婦たるものが、家政を整理する上に於て缺ぐ可からざるの業務は直接裁縫にあり、其貴賤貧富の如何に拘らず、婦人處世の一要務として、よし自ら手を下して爲さゞるも、必ず普通裁縫の心得はなかるべからず、これ既に婦人一般の識認する處にして、今更ら千言萬語するの必要を見ず、故に予はこれより裁縫術の精神が家政上に及ぼす三四の利益に就きて一言せんと欲す。

抑も婦人が一家の主婦として家政の衝に當り萬事を處理する上に於て、必要なる精神上の要素は、忍耐にあり、綿密にあり、節約にあり、清潔にあり、而して此等の諸德を修養するの時期は、是非共子女敎育期に於て之を望まざるを得ず、敎育上直接に此等の諸德を涵養するの道は修身學あり、家政學あり、衞生學ありと雖も、予は寧ろ子女敎養上殊に此等の諸德を涵養するに恰當なる間接の學課は裁縫術にありと言はんと欲す、裁縫は固より一科の技術に相違なし、然れども其技術中に存する精神をば適當に發揮し、應用し來らば、將來彼等が家政を整理する上に於ての利益蓋し鮮少ならざるべし、何となれば裁縫術なるものは、頗る忍耐を要し、綿密を要し、節約を要し、清潔を要するの業務にして、衣服を裁縫するの際もし此等の諸德の



必要は發明を生す

一たりとも缺ぐるとある時は、到底完全なる仕立物をなすこと能はざればなり、故に裁縫術には必ず家政上に必要なる此等の諸德を履行實踐せしめざるべからず、斯く裁縫課敎授上に於て裁縫科に必要なる此等の諸德を涵養することは女子敎育上殊に將來家政の衝に當るべき一家の主婦たるものを養成する上に於て切要なるは勿論なり、然れども較もすれば女子敎育上裁縫科を以て單純なる一科の藝術なりと心得、精神上の諸德を修養するの道は、他に其學科のあるありと言ふものあるに至りては思はざるの甚しき者と言はざるを得ず、精神的裁縫の修養と家政整理上の關係豈に等閑に附すべき事柄ならんや、

四月中の植物

藤　紫白とも四月下旬よりそろ〱生咲にすべし花季なかし、室に入れて早咲にするもよろし。

牡丹　中旬よりちらほら開花す、風雨を防ぎて花期を永からしむべし。

薔薇　は薔冬の後れ花下旬より追々新花を出す、あぶら蟲等の害蟲を除きて能く芽及蕾を保護すべし。

梨樹　七八月の候實付を賞翫せんとならば、今より落花の後、一房の花莟數本の中より一房毎に花莟の細長にして勢なく惡しき傾向あるものを摘み取るべし。

櫻草　櫻草は其名の如き美しき草花なり、上旬より開花す盆栽又は地植として樂んでよし。

蘭　は此月中旬よりそろ〱日影棚に出すべし、下旬より植替によろし、其方法は先づ植え替へんと欲する蘭を鉢より拔ぎ取り日向水にて洗ひ、附着せる泥土を荒去りにし、更に清水にて篠葉の間に寄りたかる塵芥又は蟲類を洗ひ去り、又古葉腐根をも鋏み去るを要す、右終らば板或は蓆を敷き、其上へ蘭を配列すること凡一時間、一葉々々に柔き布にて丁寧に濕氣を拭ひし

かゝる後適宜の鉢に植え替ゆべし。

萬年青　中旬より徐々と旭日に當つるもよけれど、必らず強き日光に見せしむること勿れ。

棕梠竹　各種とも中旬より室外に出して妨なし。

庭櫻、郁李　上旬より開花す、併しこれは花にて賞翫するよりも八月頃實付にて觀賞す。

養鶏につき

此道の商賈人の話を聞くに素人の家にて十羽以下の鶏を飼育するは最も利益多しといふ、人煙稠密なる大都會の市中にては家屋に餘地なければ養鶏に困難なれど、少しく邸宅の周圍に餘地あらば十羽以下の鶏を放ち飼ひし、朝夕厨下の殘物を與へて廢物を利用し、其他は日々少々宛の雜穀類（米は滋養最も多けれど價廉ならざれば小麥又は小米又はさらごと稱して蕎麥の粉の餘滓に糠を混じて與ふれば割安なり）を副食とし與ふべし



さて其利益は十羽の鶏中二羽を雄とし、殘る八羽を雌とせば一ヶ年平均一日の產卵數四五顆とし、一顆を一錢五厘とすれば五顆にて七錢五厘なり、十羽の鶏に與ふる餌代、一羽三厘とし則ち一日三錢を引去るも四錢五厘の利益にして一個月一圓三十五錢となる、其飼育法は鶏等自ら好む所にまかせ啄み食

ふものなれば別に面倒にもあらず。

鷄種の撰擇は能く注意し成るべく産卵の多きを擇むべし、西洋種の中にてアンダルシヤン、ミノルカ、レグホーン、ハンボーク等最も評判宜しく、成鷄を買ひ入るもよし、雛を養ふもよし、卵を買ひ棲鷄を借り入れ孵化せしむるもよし、棲鷄の借代は東京にて二個月(孵化より六十日を經過せば雛鷄は獨立して生活するを得)三十錢の通例の相場なり

靴の價

◎深護謨　小牛革にて二圓より二圓五十錢前後佛蘭西革にて二圓以上三圓位迄

◎半靴　小牛革にて一圓七八十錢より二圓二十五錢位まで

◎半護謨　佛蘭西革にて三圓前後

◎半ヅック　此れは輕くて歩きよき爲め暖くなる頃など好み人多し一圓前後にて可なりの物あり

◎半長　小牛革にて三圓五十錢ぐらゐ、佛蘭西革にて四圓五十錢位、

此の外に

◎大禮式　と云ふ護謨靴あり四圓五十錢内外より四圓位迄なり

◎茶革　半靴小牛上物にて二圓五十錢位佛蘭西革にて三圓前後なり此の品昨今大流行の傾きあり又上下變りし靴も澤山あれど別に記すべき事なり

◎形　も是れと云ふ程の變りなし今迄通りと思へばよし

◎編上　は流行せず

雜錄

婦人の世界

◎醫學修業は夫の爲　前々號に葡萄牙の皇后醫を學ぶと云ふ事を掲載したるが、右の原因は夫王の病氣にて、近來夫王法外に肥滿し、醫師さま〴〵に養生法を勸むるも、王は一向頓着なく容躰ます〳〵宜しからざれば、偖こそ后は自から侍醫の役を務めんと急に醫學を修めらるゝにて、夫れより宮中俄に藥臭くなり、后

の夜となく日となく王の舌を見豚をとり躰温を撿し、學問の實地應用に餘念なしとぞ云ふなる。



春與七種（遊山）

◎米國婦人の驕奢　金多ければ、奢長ず。米國新約克の婦人が金剛石を愛しておの〳〵貯へ居る高は左の如くなりと云ふ。

井リアム、アストル夫人	二十七萬圓
スラットレー、マアテン夫人	二十七萬圓
カステラン伯爵夫人	二十七萬圓
ヘンリー、スローン夫人	二十二萬五千圓
井リー、ヴアンダルビルト夫人	十八萬圓
タウンセンド、パアデン夫人	十八萬圓
コルチリオ、ヴアンダルビルト夫人	
以下八名	九十萬圓
合計	二百二十九萬五千圓

◎世界一の大洗濯屋　英國倫敦の南郊にあり。建物の長さ四百呎にあまり、四階の高さに達す。此に働く男女二百五十人、器械は二十萬圓近きものにて、長九呎の大火熨斗十個あり、おの〳〵一時間に千五百枚のも

のをのす。偖此大洗濯屋にては、大抵一週間に三百萬枚の洗濯をなし、乾し縄は一時に七哩の長きに及ぶと云ふ

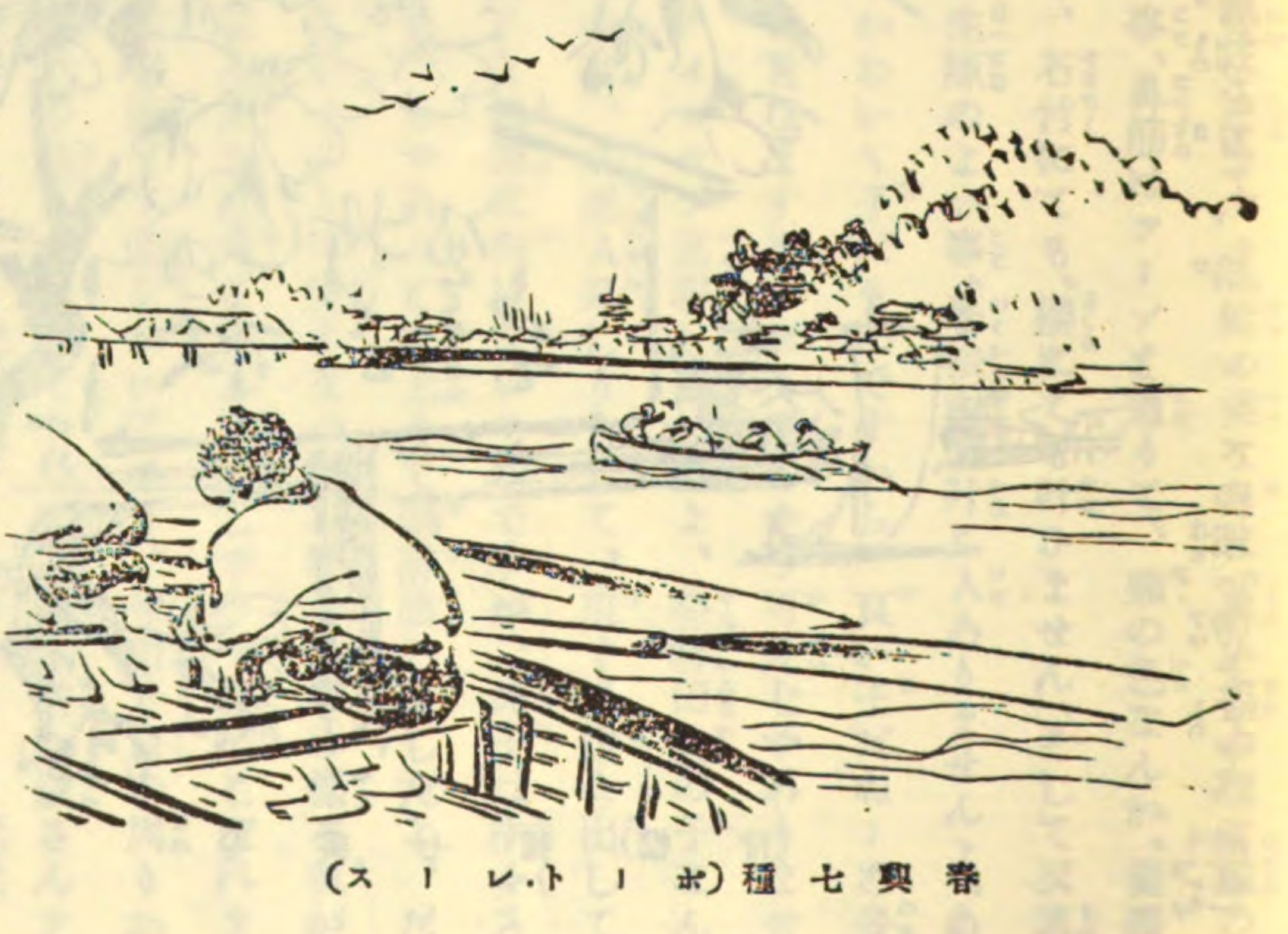
◎合衆國婦人の自活と職業　合衆國は獨力自活する婦人三百萬人あり。職業の種類細別すれば、四千四百種に上る。また大學高等中學專門校等に勉學する女子は、四萬人に上ると云ふ。

◎同國の女敎師　小、中學の敎師は婦人を最上とす。合衆國にては、女敎師の數二十四萬人に近く、敎師全躰の七割近くを占む。

オーヅオルスの詩「吾儕七人」の面影

三鷹子

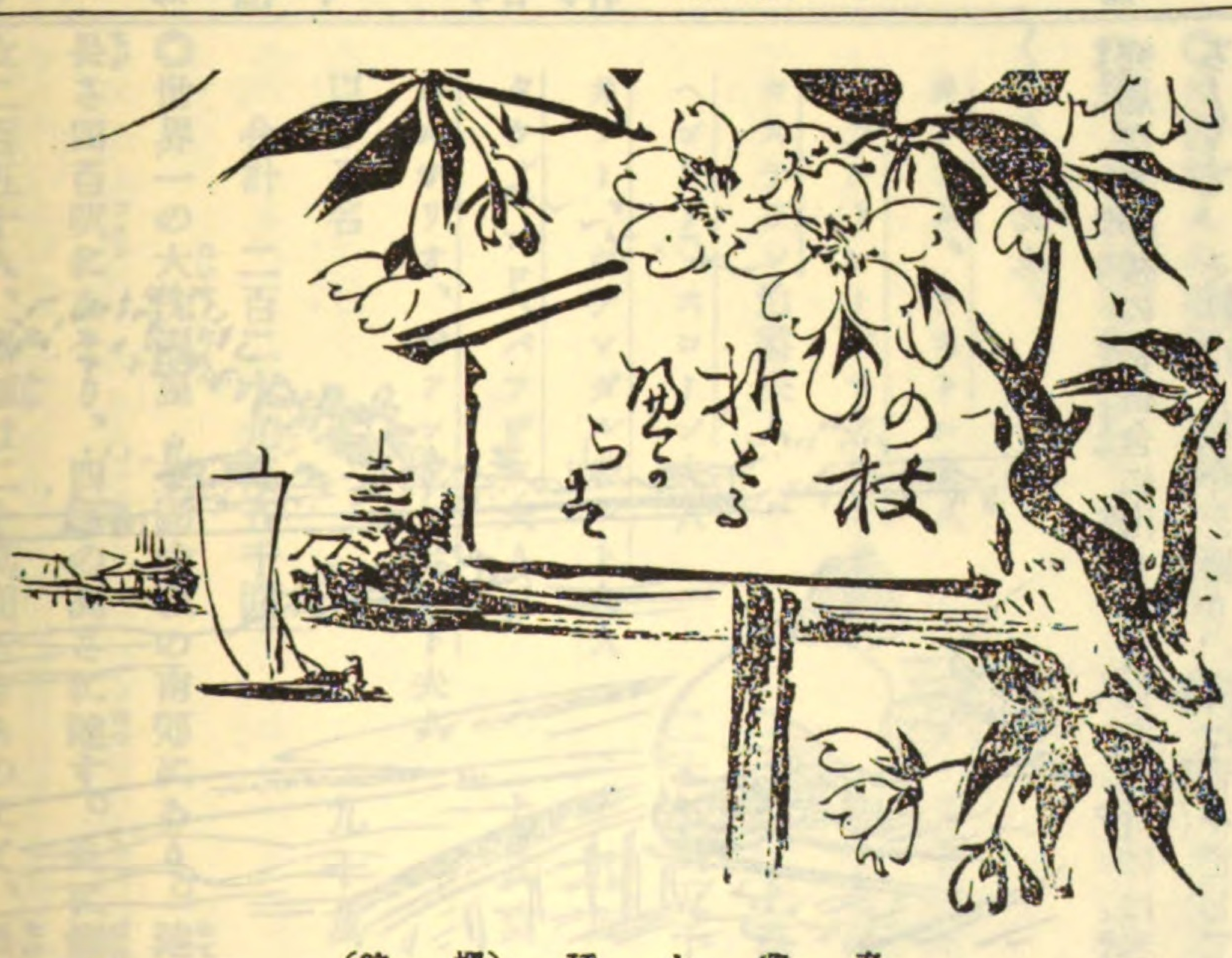
心なき草木も、今此時と折を得顔に、生ひ榮えたる彌生の春の中頃です、啼く鶯や飛ぶ蝶々に促かされて、



春與七種（ホート・レース）

究屈なる學校の寄宿舍に出で見ました、野には春色みち〳〵て、それは〳〵今を盛り、麥は青々として菜種

の花もたくさんあり、水も亦悠々と流れて、あちこちに櫻も見え山々には薄絹のやうな霞がかゝりて、言葉も及はず奇麗です、誠に奇麗です、實に今は一年中の好時節、夏の納涼も秋の月見も但しは冬の雪見でも、だうして〳〵及びませう、眺めは春にかぎります、告天子は高い處にいと面白く囀づり、風はほんのりと暖かく、歸るそらはありません、ですからつい〳〵我識ず、一足二足と前に進み、たう〳〵本郷村といふて、中野の裏です、十二社の森の近くまで來ましたから、これは餘りに遠くまでと心づいて、最う歸らうと思ひながら偶然向ふを見ますると、小さな女の子唯一人ッきり畔道で何かして居ますから、ツイ其處までいて見ました、此んな小さな子にも矢張春は樂しいと見えて、菫だの蒲英だのを摘ながら、小な聲で誰に敎はつたか君が代の唱歌を唄つて居ますのよ、そして其子ッタラテー、誠に御粗末な、寧ろきたないといふてもよい木



春與七種(櫻狩)

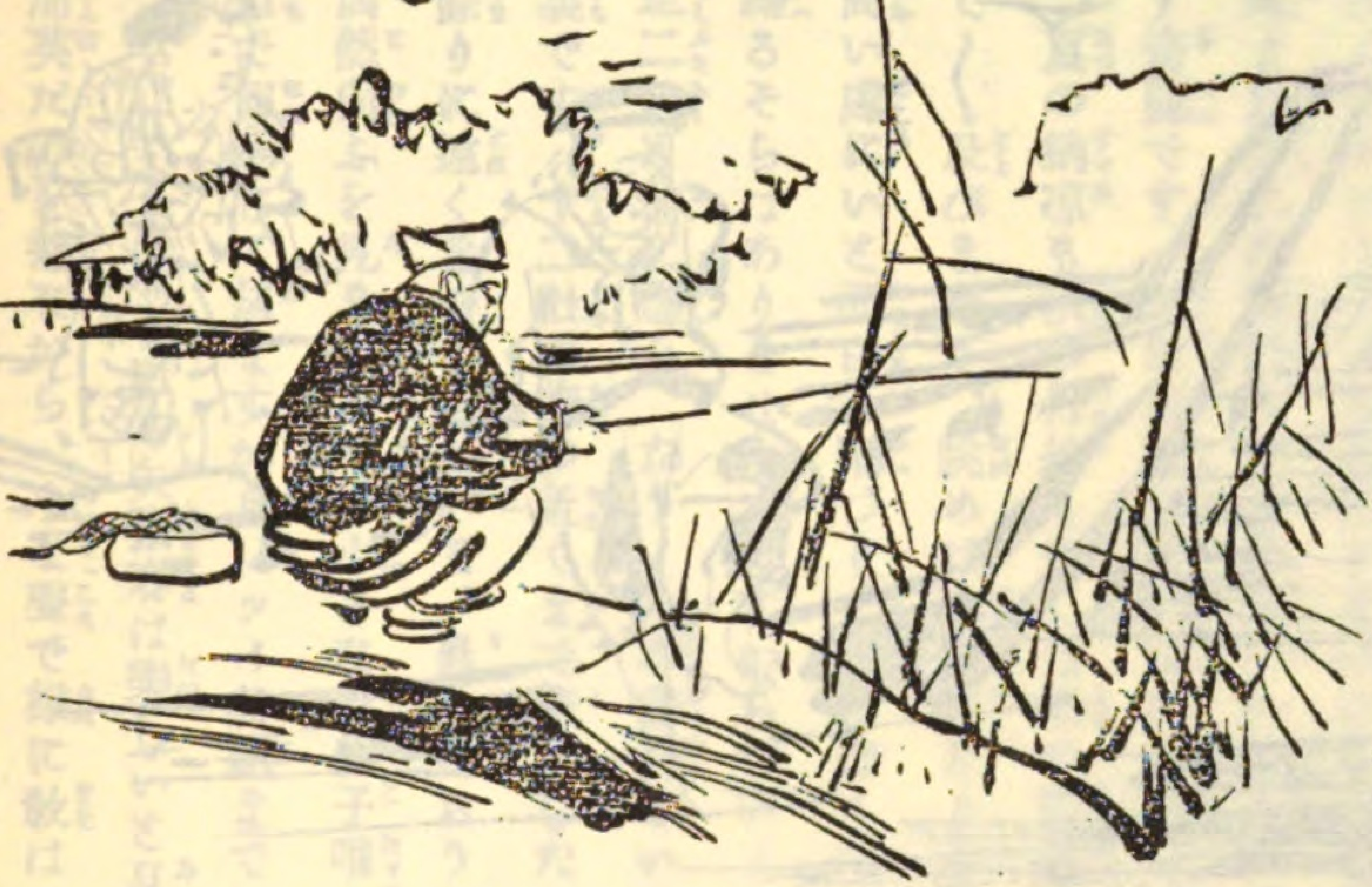
綿縞の着物を着て、緋メレンスの細い帶を〆て、桃色

の小さな毛糸の巾着を提げて、身なりは田舎の百姓の子に相違ないのです、ところがまあ御聞なさいよ、其



春興七種（汐干狩）

子の可愛い事ッタラ、鈴の様な目に、黒い墨の様な瞳の明な事、鼻筋はツーンと通りて、頬の色なんか、薔薇にても、石竹にても、櫻にても叶ひません、そして又其頸筋の生際のよい事、學校中で叶ふ人ありませんよ、あんまりかわいゝ子だもんですから、良い子だねーと妾しがつい言ひますと、だうでしやう可愛じやありませんか、アイヨッテ返事しましたよ、全躰田舎の子なんてーものは、大抵人見しりをして、直ぐと泣き出してそれは／＼始末に行けないものですが、此子は中々さうでなく、ちやあんと立上りて御辭義しましたよ、だから妾もいよ／＼可愛くなつて、我子か妹の様な氣がじて、ほんたうに何といふ涙でしやう、涙がこぼれました、櫛を取りて頭をかいてやり、手巾で口の周りからくびすじの處まで拭いてやつて、來る時お波さんテ友達の處でもらつた、御茶菓子のカステーラが二切たもとにありましたから、それを出して紙につゝんだま

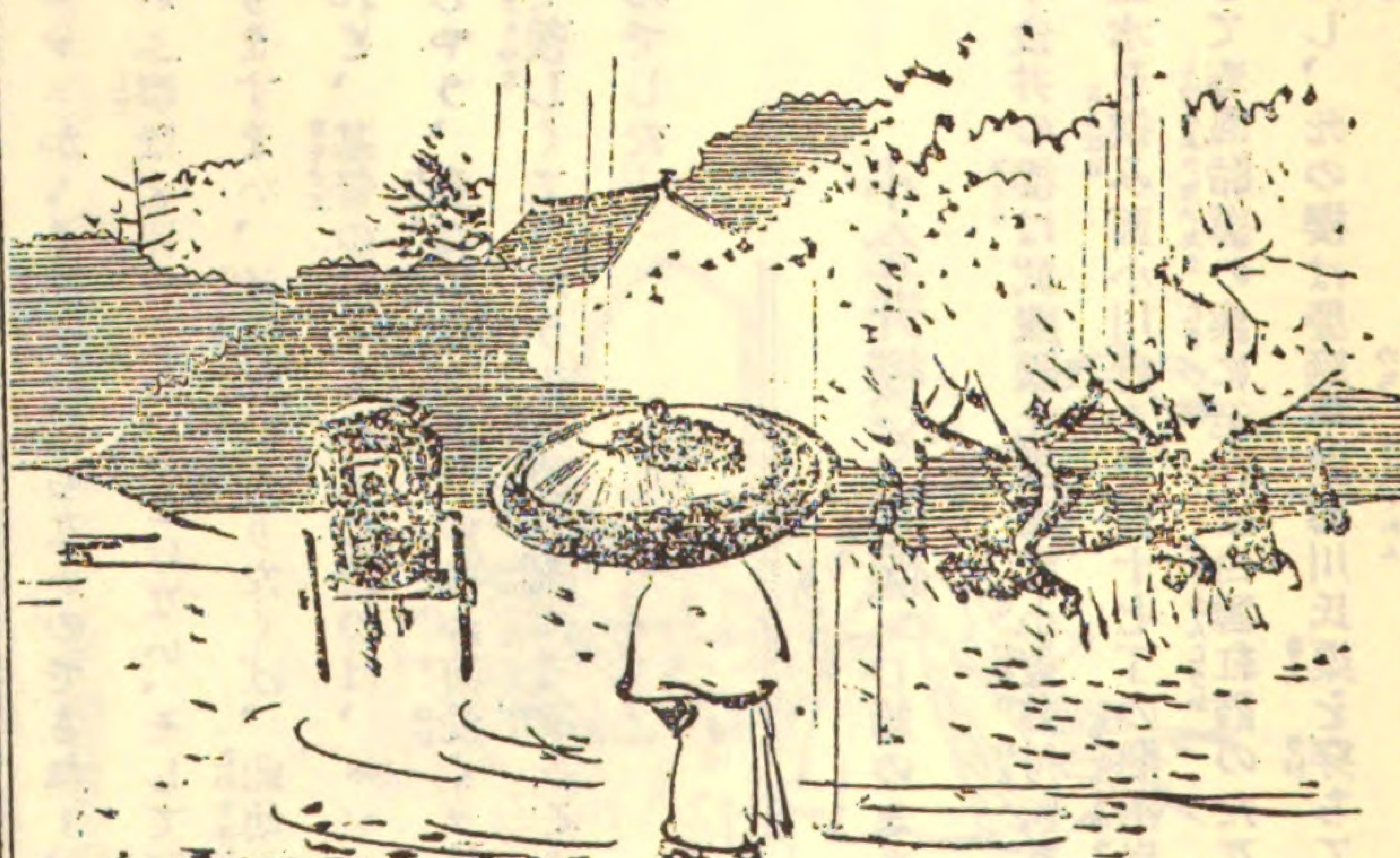


春興七種（魚釣）

まやりますと、難有うッて頂くのよ、早くお上りッタ

ラ、おッ母チャンに見せてからッテ行義の良い子でしやう、さう本當に賢い子だねー、おッ母チャンは内にかいッて尋ねましたら、ハー内に着物縫てといひますから、誰の着物をッて問返すと、あたいの、サウかいイ、ネー、そして其着物を着て何處へ行くのといふと、御花見にと答へました、そしてお前名は何てーの、アタイ花ちやんて、花ちやんいゝ名だねー、褒めると滿足な様な風に笑ひながら、叔母チャン何處へ行くのッテ、マアお聞きなさい妾の事を叔母さんて、本當に妾や可咲くて聲上げて笑ひました、すると其子も亦同じ様に聲立ゝ、妾のする通りに口の處を袖でをさへて笑ひました、そしてお前ちやん兄弟あるのッテーと、不思義さうに顔ばかり見て何とも言ひませんから、兄ちやんや姉ちやんあるかいといひましたら、ハイあるよ、これだけあるよと片手ひろげて其上に二本のせて出しました、チャ七人澤山だねー、皆内に、イ、エ二人は下町、

下町なおに、奉公に、さう奉公に、そして其の次はい、そして一人兵隊、さう兵隊、アタイは女だから兵隊に行かないのと、さも立派な事の様に妾に教へるのよ、其外のは、芝へ、さう芝奉公にかい、およめに、アタイも大きくなつてお嫁に行くの、さうですよと妾は答へました、達ちやんきイ〳〵わるいツて藥飲んだの、苦しいてー泣いたのよ、すると神さんが來て連れて居たの、今御墓の下にねんねよ、それからアタイは最一人の鐵ちやんと遊んで居たの、又鐵ちやんもきい〳〵わるいツテねんねして、達ちやん處へ行ツタの、と始終聞きすまして、それじや七人じやないよ、五人だよといふと、七人ですよとかぶりをふりました、だツてよくおきゝよイ、かい、二人下町奉公だねー、一人兵隊イゝかい、姉ちやん嫁入、そして二人死んだの、お前それ御覧よ五人じやないか、七人じやないよと其子の手を取りて其小さな指を折りて、事を別けて言ひましたけれども、其子は中々承知しません、七人だ〳〵といふて聞きません、達ちやんも鐵ちやんもお墓の青い



春興七種（春雨）

草の下にねんねしてるの、其處まで內から近いのよ、すぐよ、だからあたい何時も〳〵其處へ遊に行くの、中野の叔母さんにもらつたおもちや持てよ達ちやん鐵ちやんなぜまだおきてこないのだつてお母ちやんに聞いたら、今にツてお母ちやん泣いたよ、妾しも此言を聞て泣きました、それはねんねでないよ二人とも死んだのだよ、なくなつたのだよ、お前の手もあんよも動くだろ、走れるだろ、然し達ちやんも鐵ちやんも動けないのよ、走れないのよ、二人は死んだのお前は生きてるのよ、二人なくなつたから殘りは五人じやないかと、幾らいふても解らないの、七人だ〳〵といふて聞きませんでした、マア何といふ罪のない事でしやう、初めにアタイ大くなつたら嫁入するといひましが、實にねー大くなつて嫁入する、嫁入は女の苦しみの初です、それからだん〳〵と種々樣々の苦に苦を重ねて、其行先の行末には死といふ尤も大きな苦しみのあるとを、ホンニかゝる幼子は知らないのでさねー、人世無知といふ事ほど罪のない、あどけない、そして可愛ものはありますまい、汝天國に入りたくば、此幼子の如くになれと、基督の仰せられましたのは、ホンニ此れが爲でしやう、妾は本當に此子の心が可愛くツて〳〵、そして羨しくて、だうも其傍を離れて歸ることが出來ませんでした。

小金井櫻と瀧櫻 (口繪のゑとき)

小金井の櫻は武藏國北多摩郡小金井村にあり、多摩川上水を挾み西小川村まで五十七丁の間兩岸悉く櫻花にして春風駘蕩の候に至れば白雪紅霞のたなびきたるが如し、此の櫻は慶應年間德川氏渠を穿ちて多摩川の清流を江戶に引くの後、郡官某大和國吉野山、常陸國櫻川より眞種を移植し、嘉永年間にも田無村の某と言へ

るもの沿村の民と議りて更に數千株を増栽せりと今や鐵道の便あり一時間を費さずして同所に至るを得れば毎年春期には都人羼主蟻集して一日の歡樂と爲す、詩あり『雲霧漠海東邊。櫻樹爛熳競ニ麗研一。小金井花世所レ識。芳嵐將レ讓花嫖娟。此花近來人贊嘆。芳名爾後千載傳。墨江飛島山古蹟。未レ春探レ春人數千。昔時台嶺花第一。舊藩下馬不レ能レ前。維新以還小金井。新鮎垂釣碁ニ玉川一。春服始成如ニ蟬翼一。著錦倚綱獨稱レ仙。蝙蝠傘開人成レ伍。一身僅能避ニ雲煙一。詩章短篇鄙衆レ衒。酴醸濁比ニ靑蓮一。吾曹唯見花艶麗。百花猶盛散ニ靑天一。』と

瀧櫻は盤城國田村郡三春瀧村にあり、未だ天下に其名を博せざれども古奇の名櫻たるは、天下に冠たるべし、其幹は男帶四條ならざれば抱圍すること能はず、其枝と枝との間は十八間に及べり、近くより望めば枝稍多端にして却つて風致に宜しからざれど、遠く丘より望めば大瀑の懸下するが如き觀あり、故に瀑櫻と稱す、此樹の齡幾何なるを知らず、少くとも千年以上のものなるべし、樹は僅に一個なれど千櫻萬木の觀賞に値す



春興七種（春野）

裁縫の唱歌

大橋柳湖生（投）

女子の手業さはなれば、都もひなもをなじなへて、高き賤きへだてなく、裁縫の業を知り得べし、この學びの第一を、一つ身たちと云ふぞかし、身たけは二尺そでは尺、袖よりとるは襟をくび、これを合せて總たけは八尺をもつて定めとす、其第二を三つみたち、このさうたけは一丈と、三尺五寸をまづそでに、六尺をとりて其内で、襟をわり出し殘りたる、七尺五寸を三つにをり、其折目をば右よりも、また左よりなかばまで、たちこみ終りかねの手に、其まんなかをたち合せ、ひろき方にて衽となる、此の裁方はいとかたし、兩面ものにあらざれば、裁とならじと覺ゆべし、其の第三は四ツみたち、まへ身そらぬひとなし、後身よりは襟をとり、そをたけ一丈八尺と、心の内にしるすべし、その第四は本たちに、このそうたけは一反と、定めてあれど人々の、身の長短と仕立には男女のわかちあり、凡そ男はまへ身をば、先づ七寸にうしろ身は、まず八寸にみごろをば、三尺あまり七八寸、そでは一尺四五寸に、かたゆき一尺七寸五分、をんな身はば男より、後もまへも五分つめて、三尺あまり六寸に、みごろのたけは四尺ほど、袖たけ一尺五六寸、かたゆき一尺六寸五分、襟はをくびは半幅に、それとなくびに棒鍵の、二樣あるのは外にあらず、丈ある者は棒にたち、丈なき物は鍵にたち、これ裁方のあらましぞ、これを知り得しらずは、不自由極むのみならず、女子の道にも缺くぞかし、思ひ務よ乙女たち、學び勵めよ、乙女たち

く

林由義先生の家庭教育に關する遺稿（上）

中川愛氷

先生は寛政十二年八月三日信州松本に生る世々松本藩士たり幼にして劍銃弓槍の術を好み一として之を學ばざるなく學んで之に達せざるはなし且つ古典に通し和歌をよくす常に京師に往來して香川景樹と名聲を齊ふす先生夙に家庭の敎育に注目し謂らく家庭の紊亂するは其間に道義の缺ぐる所あるを以てなりと居常言行を愼み一擧一動之か規矩となり準繩たらざるはなし文を草する亦爾り徒に花月を弄唱じならず硯海の一句常に敎育の大計となる外孫渡邊浦人君現に職を遞省に奉ぐ乘て商業學校の講師たり學識衆に秀で夙に資性篤實行爲端正を以て人の賞揚する所となる君妻子あり兩堂猶ほ慈顏を呈す七人の家族未だ甞く風波の蘆荻に及びし事なし其親睦なる琴瑟の松風に和するが如く霞裡に鶯聲を聞ぐか如し蓋し先生が懇到なる薫陶今日に於て益々焯灼たる所以なり感化の力亦大なる哉今先生の遺稿を得たれば記して以て誌面の餘白を埋む

冬子（命名の記）

こたび渡邊政明か嫡女の生れしに時しも冬の季つかたなればそが儘ふゆと名づけり女の德はこれに越ゆる物はあらじ水は靜かなる物にして火によらざれば立つ事なし男は陽女は陰男は火女は水なれば女は夫に身をよせて順ふは自然の道なり水は低きにつきさからはぬが性なれば女はすなほにしてあらさう心なきこそ美德なれ人の智は五行の水なり水は鏡の如くあるが儘に物うつりて物にあまねくいりわたる物なれば人の智も心に邪なく欲すくなければ水に濁りのなきが如く照す事明かなり明かなれば善を惡と見惡を善と見るのまどひなくあまねく人情に入りわたるものなり女は專ら此德を

まもり善をとり惡を捨て夫舅姑につかへまつるはさらなりなべて人に情深きを心とすべし貞もまた陰の德にして地に等しく時は冬にわたれり地は天の惠に順て萬物を養ふ物なりさるが故に女は身を終るまで夫にしたがひ萬物を養ふ事を司どりて誠を盡すを貞女といへり文字にふゆとかいつけしは冬は萬物を惠むの氣をふくみ春にうつりて萬物に惠みをあらはし富をなすとひなればなり冬や成長の後此祖父がいま名をつけ與へたる心をおもひ出て操正しく貞女の道を行はゞ金をつむのとみはなさずとも心廣く身をゆたかに年月を過るのさちはいたるべしこは今より祖父が願ところになむ（嘉永五年十二月二十七日）

名を時候に取りて精神に及ぼす其妙云ふべからず聊か附會の嫌なきに非ずと雖も筆到り意も亦到る

元治二年四月江戸詰仰付けられ松本出發の際見送る家人は輿より首さし伸べて

淵は瀨にかはりゆく世のさまなればとゞさらつくせ武士の道

折しも櫻花片々として遠寺の鐘に散る惜別の耳には如何に響くらむ

此の一首以て其人と爲を知るに足る況んや其の聲調の雄渾雅健なるに於てをや

歌苑

寄妹子　空花生

雨になやめる　女郎花、
風にもまろゝ　糸柳、
よはきは女の　情なれば、
うきを忍ぶも　をみな子の
まぬかれがたき　數ぞかし。
まぬかれがたき　數なれど
この世は雲を　おふがごと
むなしきものに　あざられば、

ぬらす袂の　びさ露も
あだにきゆべき　ものならじ。
浮きつ、しづみつ　たき津瀬の
涙にくつろ　憂き身ぞさ
くごきたまへご　この涙
くみて味はふ　ものにこそ
人のまことは　知ろなれ。
花のうてなに、露の床、
たのしきものは　この世ぞさ
うたひつ、舞ひつ、春の野ら
我身ひさつに　かけめぐろ
蝶の行する　あはれなり。
てろ日の影に、月の夜に、
吾をしたひて　うちつごふ
みやび男子の　數しれず、
花の女王の　この姿
見よやさいふも　束の間や。
花にはあらし、月にくも、
月をおほふは　雲なれご、
花をちらすは　風なれご、
露をふらすは　雲のため、
くもをはらふは　風のため。
雲さかぜさの　ありてこそ
花もさほさく　かほろなれ、
月もさやけく　にほふなれ、
憂ひかなしみ　なかりせば
人のこの世は　夢ならめ。
雨にうたれて　女郎花、
花のかほりは　さこしへに、
風にもまれて　糸柳、
かへぬ操は　いくちよに、
つきせぬ數さ　なろになむ。

あだし野の露

中川愛氷

髮結ふ頃さもなろならば
かさしてたもれ母さまよ
薔薇の花の花かざし
五つにならば父さまよ
遣つて下され學校へ
ご本も買ふてたまはれさ
すがりしあの手あの目もさ
花はづかしきおもかげも
夢さ消にゆく果敢なさよ。

思へば過ぎし二十日前
　蝶よ花よといとし子の
笑みし面わもありにしを
　つれなかりける世とはいへ
風の心地とうちふせし
　かりの病もかりならで
日にちゞみゆく玉の緒を
　繋ぎとめなんよしもがな。

重きやまひの枕邊に
　汝が父母やはらからは
　　夜の目もあはず一すぢに
神にこひのみ禱葉の
　常盤堅盤といのれども
　　其甲斐なくて惹渡る
かれを此世の副納め
　行すゑしれぬ死出の山
　　たどる關路やくらからん。

浪風あらき浮世とて
　早くも神のいざなひし
身を切る風にも櫻かほり
　磯打つ浪にも月やどり
岩にせかるゝ谷川も
　錦おごらす事あるに。

神よわづかの齢なば
　何とて汝に授けしぞ
　　授けられしぞうらみなる
紀念にのこる花かざし
　手箱のうちにそのまゝに
　　殘るを見るもかなしくて
朝夕なげく父母の
　涙よもしも露あらば
　　流れて行けよ苔の下
嵐に散りしく春の花
　野分にしほるゝ秋萩も
また來む年に咲くものを
　一たび去りてまた來べき
　よしなき汝こそあはれなれ
　よしなき汝こそあはれなれ

社告

倍々歌苑欄を擴張し汎く三十一文字及新體歌を募集す次號より斯道の大家磯邊千波君(匿名)の批點を經て紙上へ掲載すべし
第七十六號(四月廿五日分)の歌題は
花盛　野菫
暮春　田家
(但し新體歌は題撰隨意)

家庭雜誌社

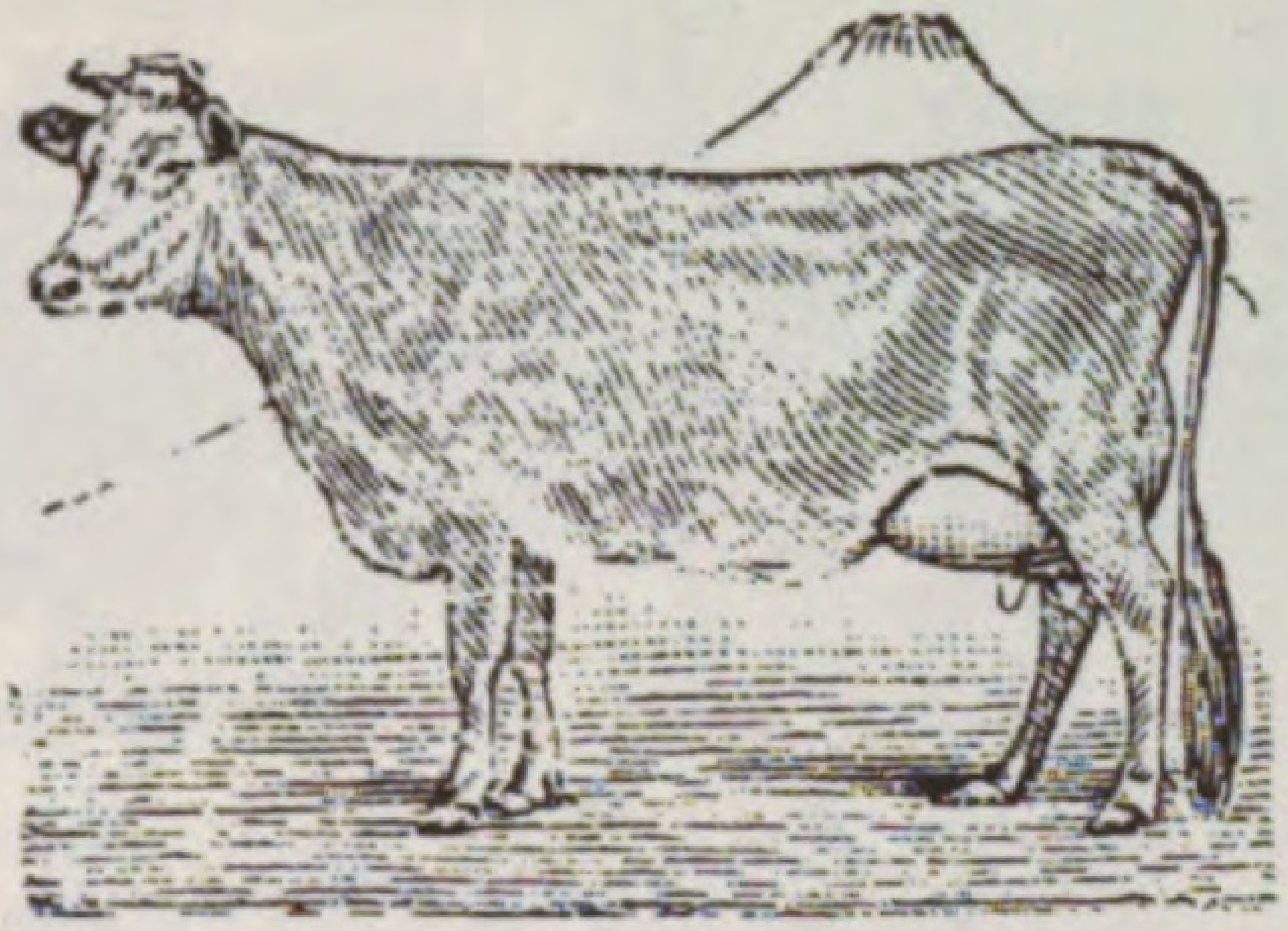
本社電話番號七十番

發行兼印刷人 金子佐治郎

編輯人 金子佐平

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治廿五年九月十四日逓信省認可



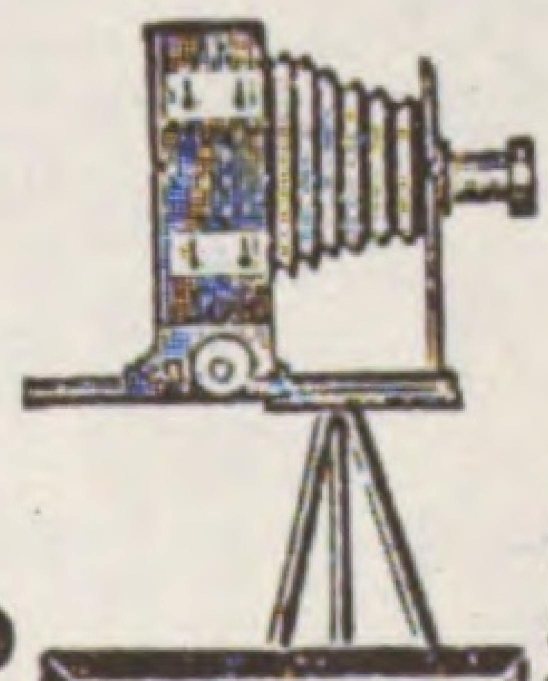
舍主宇都宮仙太郎は米國ウイスコンシン州農科大學乳業科得業生なり畜牛は毎週囑托獸醫の診斷したる健全の者なり醫科大學にて毎日試驗濟の上御買上に相成居れば乳質の善良にして安全なる推して知る可きなり代價は世間並に候御試用の上御吹聽願上候

麹町富士見町六丁目一五
帝國大學醫院御用
回陽舍
電話六百十九番

國民之友英文之部
極東 第三冊
毎月壹回廿日發兌
定價壹冊 金十二錢

來る四月二十日刊行の極東には福地櫻痴の寄書「日本の演劇」と題する名文あり
廣告締切期日四月十二日

自宅獨習會員募集



寫眞術

●簡易科三回期卒業●郵券二錢送らば詳細なる手續書を送呈すべし

●東京銀座三丁目二十七番地 寫眞術研究會●

轉居
麻布區市兵衛町二丁目二十二番地
金子春夢

廣告

米國「コルトン、カレッヂ」卒業の日本婦人（年齡三十科學精通）にして公私學校の教師又は內外人家庭の內教師たらんことを望む人あり、希望の御方は家庭雜誌社小生まで御照會あれ

四月五日
京橋區日吉町家庭雜誌社內
金子

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		地方郵稅
一冊	金五錢	金五厘
半年（十二冊）	前金五十錢	共金五十六錢
一年（廿四冊）	同金一圓	共金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式會社秀英舍印行